新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集３

신주쿠에 새롭게 이주해 오신 한국인들의 라이프 히스토리 기록집　3

新宿の韓国人100人の話プロジェクト

新宿区百人町大久保通り

2011 年 5 月 5 日

目次

ごあいさつ / 인사말 …… 1

プロジェクトの概要 / 프로젝트 개요 …… 3

＜私のナラティブ：自分と新宿区との関わり＞ …… 5
新大久保の原風景　―母のライフヒストリーに寄り添って―
川村千鶴子
＜나의 내러티브 : 신주쿠구와의 관계＞ …… 11
신오오쿠보의 마음속 깊은 풍경
-어머니의 라이프 스토리의 곁에 다가서서-
카와무라 치즈코

＜インタビュー　1＞ …… 18
C さん（30 代、女性）「今が人生のピーク」
2010 年 3 月 1 日、ソウル出身、専業主婦、日本在住 9 年
インタビュアー：ソン・ウォンソク

＜インタビュー　2＞ …… 21
ヒロさん（30 代・男性）　「韓国でできないことをしましょう」
2010 年 4 月 11 日、京畿道出身、大学院生、日本在住 4 年
インタビュアー：若園雄志郎
＜인터뷰 2＞ …… 23
히로씨(남성) “한국에서는 하지 못 하는 것들을 해봅시다.”
2010 년 4 월 11 일, 경기도출신, 대학원생, 일본체재 4 년
인터뷰어 : 와카조노 유우시로

＜インタビュー　3＞ …… 25
J さん（40 代・女性）「日本で人生のチャレンジをする」
2010 年 6 月 2 日、ボンファ出身、パート勤務・韓国語教師、日本在住 15 年
インタビュアー：藤田ラウンド幸世
＜인터뷰 3＞ …… 28
J 씨 (40 대, 여성) “일본에서 인생의 도전을 하다”
2010 년 6 월 2 일, 봉화출신, 파트근무, 한국어강사, 일본체재 15 년
인터뷰: 후지타 라운드 사치요

＜インタビュー　4＞ …… 31
O さん（20 代・男性）「自分の力で何とかできるのがいい」
2010 年 7 月 21 日、チャンウォン出身、日本学校生、日本在住 1 年半
インタビュアー：藤田ラウンド幸世

＜インタビュー　5＞ ····· 34
K さん（20 代・女性）「もっと勉強をするなら日本で」
2010 年 7 月 23 日、テグ出身、日本語学校生、日本在住 10 か月
　インタビュアー：藤田ラウンド幸世
＜인터뷰 5＞ ····· 37
K 씨 (20 대 여성) “더욱 더 공부를 한다면 일본에서”
2010 년 7 월 23 일, 대구출신, 일본어학교생, 일본체재 10 개월
　인터뷰: 후지타 라운드 사치요

＜インタビュー　6＞ ····· 40
Z さん（20 代・女性）「日本で学び、写真作家になりたい」
2010 年 7 月 23 日、ソウル出身、日本語学校生、日本在住 1 年 7 カ月
　インタビュアー：藤田ラウンド幸世
＜인터뷰 6＞ ····· 43
Z 씨 (20 대, 여성) “일본에서 배워서 사진작가가 되고 싶어요”
2010 년 7 월 23 일, 서울 출생, 일본어학교 학생, 일본체재 1 년 7 개월
　인터뷰: 후지타 라운드 사치요

＜インタビュー　7＞ ····· 46
イサオさん（30 代・男性）「映画ばかりの三十年」
2011 年 4 月 20 日、テグ郊外出身、大学院生、日本在住 3 年
　インタビュアー：渡辺幸倫

＜『中間報告書』の感想　＞····· 49
中間報告書を読んで　栃谷 佳宏（31 歳、男性、教員、東京都）

＜コラム＞ ····· 51
新宿への誘い　　呉　世蓮
＜컬럼＞ ····· 52
신주쿠로부터의 권유　　오세연

スケジュール / 스케쥴····· 53

プロジェクトメンバー / 프로젝트 멤버 ····· 54

ごあいさつ

新宿にいる韓国人の話を聞いてみませんか？

2009 年に始まった『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成』プロジェクトも二年目に入りました。今回の記録集には全 7 人のニューカマー韓国人のインタビューを中心にまとめてあります。

なお、2010 年の 10 月には初年度の成果を中間報告書として、全 27 本のインタビューと解説記事などを発表しました。プロジェクト全体の詳細とあわせてホームページ上にも掲載されています。興味のある方はアクセスしてみて下さい。

新宿では東日本大震災とそれに続く福島原発危機の影響が確実に見えています。今回の記録集のインタビューの多くは、この震災以前に行われたものですが、今後このプロジェクトの中にも震災の影響が現れてくるのではないでしょうか。

今後も全部で 100 人になるまで定期的に発行していきます。

お楽しみに！

2011 年　5 月 5 日

研究代表　渡辺幸倫

このプロジェクトは、トヨタ財団 2009 年度研究助成　（D09-R-0422）『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成― 顔の見える地域作りのための基礎作業 ―』（2009 年 11 月~2011 年 10 月）の助成を受けています。
（http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/default.aspx）

인사말

신주쿠에 사시는 한국인의 이야기를 들어 보시지 않겠습니까?

2009 년에 시작한 “신쥬쿠에 새로이 이주해 오신 한국인 여러분들의 라이프히스토리 기록집 작성” 프로젝트도 벌써 2 번째 해를 맞이하였습니다. 이번 기록집은 전부 7 명의 뉴커머 한국인 인터뷰를 중심으로 만들었습니다.

그리고 2010 년 10 월에 초년도 성과를 중간 보고서로써 총 27 개의 인터뷰와 해설기사 등을 발표했습니다. 프로젝트 전체의 상세 내용과 함께 홈페이지에도 게재하였습니다. 관심있으신 분은 들러 주시길 바랍니다.

신주쿠에서는 동일본 대지진 재해와 잇달은 후쿠시마 원전 위기의 영향이 확연히 들어나고 있습니다. 이번 기록집 인터뷰의 대부분은 이 지진 재해 이전에 행한 것입니다만, 앞으로 이 프로젝트에서도 지진 재해의 영향이 나타나지 않을까요?

앞으로도 총 100 명이 될때까지 정기적으로 발행할 예정입니다. 많은 관심 부탁드립니다.

2011 년 5 월 5 일

연구대표 와타나베 유키노리

이 연구는 도요타재단으로부터 연구조성프로그램의 조성금(조성번호 D09-R-0422) 『신주쿠에 새롭게 이주해 오신 한국인들의 라이프 히스토리 기록집 작성—얼굴이 보이는 지역사회만들기 기초작업—』을 받아 이루어지고 있습니다. (기간 : 2009 년 11 월부터 2011 년 10 월)

(http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/default.aspx)

プロジェクトの概要

多文化・多民族化する日本の地域社会で、住民同士のつながりをどのように作っていくのかが重要な課題となっています。特に新宿区では韓国人ニューカマーが大きな存在感を持っているものの、地域の人々との接点は必ずしも多くなく、「顔の見える関係」という地域作りの基盤が弱いといわれています。

本プロジェクトでは100人の韓国人ニューカマーに一人一時間程度のライフヒストリー・インタビューを行い、その内容を本人の同意のもと、定期的に印刷物・ホームページで公開し自由に共有できるようにします（インタビュー方法の詳細については、『記録集 1』の武田里子「インタビュー調査について」をご参照下さい）。重要な社会の構成員としてインタビューされる人々の地域社会への所属意識向上が期待できるとともに、受け入れ社会側には「地域にいる『韓国人』も、かけがえのない人生の一時期を、同じ地域空間を共有しながら生きている」という気づきが可能となるのではないでしょうか。

このプロジェクトの理論的背景には、人生を語り／聞くことで世界観を作っていくという物語（ナラティブ）理論やライフサイクル論などがあります。本プロジェクトは、インタビューを通して、関係する全ての人が自己を肯定しながら社会を理解できるようになることを目指しています。このような人と地域のつながりを作る手がかりを得ることが本プロジェクトの目標です。

프로젝트 개요

다문화, 다민족화가 진행되고 있는 일본 지역사회는 주민들 사이의 연결고리를 어떻게 만들어 가느냐라는 중요한 과제를 안고 있습니다. 특히 신주쿠는 한국인 이주자가 큰 존재감을 가지고 있지만 지역의 주민들과의 교류가 적어 “얼굴이 보이는 관계” 라는 지역사회를 만들기위한 기반이 취약합니다.

본 프로젝트에서는 한국인 이주자 100 명에게 한 시간 정도의 라이프 히스토리 인터뷰를 하여 본인의 동의하에 그 내용을 정기적으로 인쇄물, 홈페이지에 공개하여 자유롭게 공유할 수 있도록 하려고 합니다 (인터뷰 방법에 관한 상세한 내용은, 『기록집 1』의 타케다 사토코(武田里子) 「인터뷰 조사에 관하여」를 참조해 주십시요) ..이로 인해 인터뷰에 응해 주신 분들이 사회의 중요한 구성원으로서 지역사회에의 소속감을 고취시키는 것과 동시에 지역사회 측에는 “지역사회에 속한 한국인 또한 인생의 소중한 한 시기를 같은 지역공간에서 함께 살아가고 있다”는 사실을 깨닫게 할 수 있지 않을까요?

이번 프로젝트는 인생에 대하여 듣고 말하는 것을 통해 세계관을 만들어 나가는 이야기(내러티브)이론을 배경으로 하고 있습니다. 그리고 인터뷰를 통해 모든 분들이 자신에 대해 긍정적인 마인드를 가짐과 동시에 사회를 이해할 수 있기를 바랍니다. 즉 사람과 지역의 연결고리를 만드는 계기가 되는 것, 그것이 본 프로젝트의 목표이기도 합니다.

＜私のナラティブ：自分と新宿区との関わり＞

新大久保の原風景
―母のライフヒストリーに寄り添って―

川村千鶴子

◇　まちの誕生の原点　◇

東京大空襲の最中にも、そして平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災の直後に、瓦礫の中で産声をあげる子どもがいた。人は、どんな時に、どんな場所で、どんな親から生まれるのか、それらを選択することはできない。それ故に、産声をあげてはじめて出会う親との運命的な接触ほど、神秘的なものはないだろう。

出産は、どの文化、どの国籍、どの民族においても普遍的である。しかしながら、身ごもる環境、文化的通念、出産にまつわる文化的儀礼や慣習などは実にさまざまである。ともに生きるライフサイクルの視点からいえば、ともに生まれるというライフステージは、人生のスタート点であり、出産をめぐる社会的文化的背景は、その後のアイデンティティの獲得にも大きな影響を及ぼす。

東日本大震災から 1 ヶ月後 4 月に 93 歳の誕生日を迎えた母は、テレビの画面に津波と地震によって崩壊する家々、離散を余儀なくされ家族の表情、瓦礫の山を見ていた。その時、母の心には 66 年前、新宿を襲った大空襲が蘇ってきた。廃墟と化した新大久保の復旧の光景が、脳裏に浮かび、風化されつつある記憶がふと蘇ってきたのだ。

本稿では、母のライフヒストリーに寄り添い、新大久保の高齢者の聞き書きも合わせて、当時の記憶から新大久保という地域が戦争中どんな経験をもち、焦土と化した荒野から、いかにして復興し、再生してきたのか、その原体験と原風景を描き出してみた。

◇　戦時中の新大久保　◇

昭和 17 年、新宿はすでに B25 による初空襲を経験していた。

新大久保駅は小さな木造の駅舎で、切符切の車掌さんが立っており、周辺は緑が多く閑静な住宅街であった。駅のプラットホームの長さは現在の半分ほどで、改札口への階段は両方からではなく片方だけだった。新大久保駅のホームに立つと、大久保駅のホームが見えて手を振りあっていた。

新大久保駅のホームの真下には、20 坪ほどの洒落た 2 階家があった。白いテラスにむけてホームから声をかけると中から人が出てきて、在宅を確かめてから改札口へ降りることができたという。

この小さな家で、私の父母は見合いをした。当時は男女がめぐり合う機会も少なく、一目ぼれで双方すぐにも結婚したかったそうだ。けれども焼夷弾がいつまた降り注ぐかも分からず、戦時中、結婚式などを挙げること自体が夢であった。

そんな折、早稲田大学大隈講堂の使用が許されて、昭和 19 年 4 月 10 日、親族を集めて式をあげることができた。豪華な花嫁衣装に憧れていたが、

借れる衣装は一着しかなかった。新郎は、式の早朝、高田馬場で人数分の赤飯弁当を買って大隈講堂まで運んだ。当時はなかなか食することができなかった赤飯を見た親戚からは笑顔がこぼれ歓声が上がったという。新婚旅行は、お米を持参して熱海に一泊。

「それはそれは夢のような日々であった」とか。

◇　建物強制疎開　◇

軍事施設も多く、戸山が原には射撃場や陸軍科学研究所などもあった。空襲に備えて、線路周辺の家々にはすべて、「建物強制疎開」という命令がでた。自宅を自ら解体・崩壊する苦渋の作業に海城高校の生徒や学生たちも動員された。父は、コロを使って、その2階家を2週間ほどかけて一番街の道をはさんで移動させることに成功した。

その後、父は蒙檀の宣化（現在の中国河北省張家口市宣化県）の建築課長として単身赴任し、ほとんどの男性が、戦地に駆り出されていた。残った女性たちは毎日、防空演習や消火訓練に活躍した。運動選手だった母は、新大久保一帯の班長に指名され、鉄兜に長靴姿で防空壕を掘ったりして奔走した。記録によれば、昭和19年11月29日、B29が約80機、飛んで2時間ほどの空襲があった。

恐怖と不安、空腹と非衛生的環境、家族の離散。耐え忍ぶ日々であった。

◇　戦火の中での移動　◇

東京大空襲（昭和20年1945、3月10日）では死者8万人、行方不明者を含めると10万人以上だった。焼失家屋約26万戸と推定される。B29が出撃したのは300機以上、東京に到達したのは279機と伝えられている。東京上空の様子を、母は2階にあがって眺めた。下谷方面が火の海になったのを見た。文房具店を営んでいたYさんは、背中にリュックサックを背負って、大久保通りから文化通りを走って、海城高校まで逃げようとしていた最中、リュックには火がついたままだったという。

新大久保一帯は焼け野原となり、南方には伊勢丹と三越（現在の新宿区新宿）だけが残っているように見えた。

西方には、聖母病院（現在の新宿区中落合）だけが、なぜか残っていた。人々は、命からがら防空壕に隠れていた。

父からは、「蒙檀は平和で広々した処だから10年は住むつもりでこちらに来なさい。北京までしか迎えにいけないが。」と書かれた手紙が届いた。母は、東京を出発して九州に向かった。兄が見送ってくれた。九州で親戚の世話になり、4月10日に宣化に着いた。父との再会の喜びは生涯忘れられないものとなった。

◇　新宿の児童の学童疎開先は福島・茨城　◇

5月ドイツは連合国に無条件降伏、6月には、学童疎開が半強制的に始まっている。地域の国民学校の児童は、福島、茨城、栃木、群馬、山梨などのお寺や旅館で疎開生活を送った。たとえば戸山国民学校の疎開児童たちは、群馬県遍照寺近くの川原で朝の乾布摩擦をしている。

最近も町会のお祭りで当時の疎開生活を語りあった。

「ホームシックにかかり、ひもじかったね。」疎開生活が語り継がれて共有している。

家族の離散、戦時中の移動は、子どもたちの人間発達に大きな影響を与えていた。筆者は、国籍や民族に関わらず受容する街の形成に、こうした苦難の移動の記憶が潜んでいるように思えてならない。

◇　敗戦と廃墟からの再生　◇

東京は廃墟となった。昭和 21 年元旦、天皇陛下の人間宣言を人々はどのような気持ちで受け止めたのだろう。

母は帰国するように言われて、一人で中国から帰国の手続きをした。

3 月 25 日、1 年振りに焦土と化した日本の土地を踏み、九州の親戚の家に世話になり、姑と一緒に和歌山で墓参りを済ませ、その足で東京に向かう。新大久保一帯は焼け野原となり、折角移動したあの懐かしい家も B29 によるじゅうたん爆撃によって焼失していた。あたりは瓦礫の山で、立ち尽くすしかなかった。新宿区全域の 90%を焼失し、人口は 5 分の 1 に減少し、バラックの仮住まいの人々があふれていた。

父は仕事を済ませて後から 5 月に帰国した。

杉並の知人の家の一間に仮住まいさせてもらった。

◇　ひもじさのなかで　◇

人々は、焼け野原を耕して家庭菜園をつくりはじめた。しかし、すぐに収穫があるわけではない。【写真 1】は、新宿区目白村の復興への人々の様子で、鍋を囲んで談笑している。どこもこんな感じで、戦争が終わった喜びもあり、人々の表情が明るい。ようやく希望が湧いてきた。しかしどうやって食材を手に入れたのだろう。

焼け残った家の門の前に集まり、鍋を囲んで談笑する人々。目白文化村でのひとコマ（新宿歴史博物館蔵）。

【写真 1】空襲で焼け残った人々（新宿区目白文化村）
（新宿歴史博物館所蔵）

国民学校は 40 校のうち 23 校が全焼し、5 校が一部焼失した。青空学校がスタートした。健気な子どもたちの表情は明るかった。

連合軍による占領時代となり、山手線の周辺には、GI のチョコレートや

ガム欲しさに、子どもたちが走った。現在町会役員の S さんは、そのガムの美味しさを未だに覚えている。当時のひもじさ、食料不足は深刻だった。

◇　新宿のエネルギー　ヤミ市　◇

米や野菜をどこから、どうやって手にいれるのか。当時の闇市のことは母の日記にも記されている。江戸東京博物館には、新宿駅東口のヤミ市の模型が展示され、戦争直後の社会現象をしのぶことができる。

昭和 22 年 3 月に牛込、四谷、淀橋が統合して新宿区が誕生したころ、6・3 制が始まり教科書の内容が大きく変わった。誰もが空腹をかかえ、「民主主義」とは何のことやらよく分からないが、新しい時代の幕開けを感じていた。日本中にベビーブームが起こる。

3 月 1 日、雪の降る日に、私は産声をあげた。

◇　起業の歴史　◇

とうもろこしが垣根の役割を果たすほど成長していた。

地域の人々はそれぞれの技能や経験を生かして起業するようになる。

父は建築会社を創業し、昭和 23 年、復興の中、新大久保駅に自宅と事務所を新築した。12 坪以上の家を建ててはいけないという建築統制もあったが、玄関の隣に、洋風の応接間があって、和室 2 つ、台所と食堂。文化住宅のモデルルームとなって大勢の人に部屋を案内した。

「ぜひこれと同じように建ててください」という注文が殺到した。「いまは、お金が無いのですが、いつかは払いますよ」という注文ばかりだったが、それらを引き受けざるを得ない起業であった。

家々では、鶏、尾長鳥、犬を飼っていた。広い庭があり、池を作ってアヒルもいた。【写真 2】は、尾長鳥の写真で、背景にあるのが新大久保の自宅。鶏の生む卵が貴重な食料であったことは言うまでもない。

鶏は、大事な来客時、ご馳走の主役となった。切り落とされた 2 本の足先手先は、私たち幼い子どもの遊び道具である。

子どもたちは、「ダルマさんが転んだ」「缶けり」「ゴム弾」などたいした道具のいらない遊びに夢中になった。大きな蕗の葉は、かくれんぼの絶好の隠れ場所だった。

百人町はつつじの里として江戸時代から有名であるが、筆者の思い出は、大きな芙蓉の花が咲き乱れていることだった。

庭には大きなイチジクの樹があり、枝の間にダンボールを引いて、子供の遊び場ができたりした。正月には獅子舞やはしご踊りが人を集めて、祭りも次第に盛大になっていった。

まだ下水道も電気製品もない時代であるが、エネルギッシュで楽しい思い出がつきない。

【写真 2】懐かしい新大久保の自宅
（現在の新大久保駅付近）

◇　ロッテガム　◇

線路の向こう側には、ロッテガムの工場ができ、そこからは、なんとも言えない美味しそうな香りが、地域全体に漂っていた。ロッテガムの創業者は、韓国の本土から来た留学生で、早稲田実業を出て苦学した体験やリヤカーを引いて石鹸やガムを売り歩いていた姿を記憶している住民が多い。

町会では今でもこの創業者を尊敬の気持ちをもって語る人が多い。

チューインガムの香りは、山手線の電車の中まで漂った。近所の主婦は、ダンボールにガムやキャラメルを入れて、自宅に運び、小さな包み紙に包む内職をしていた。地域には韓国の方々が、移住するようになる。大久保通りを挟んで、歌舞伎町に向かう地域には、済州島からの移住者も増えていった。

◇　ともに生きるまち　◇

大久保駅近くにある淀橋教会は、アメリカの教会のような素朴で新しい光景を醸し出した。とうもろこし畑に囲まれ、3 歳になった私は日曜礼拝に、祖母に手をひかれて通った。敵国であったアメリカは、ともに祈る隣人となり宣教師が移住してきた。いまの文化通りあたりにあったその家は、アメリカ風の台所ドアに網戸がついていて天井の高い優雅な家だった。筆者は、中学生になると英語をしゃべってみたくて、そうした家のドアをたたき、友人となって、子守りをかってでたりした。家族ぐるみの付き合いが始まる。

「鬼畜米兵」といった時代は、コペルニックス的転回をとげ、地域は復興とともに平和の心を広げ、敵味方という考えはなくなり、楽しい交流が始まったのだ。

以上、母の記憶に寄り添って、戦後の荒廃と復興への新大久保の原風景

の一齣を素描してみた。ライフヒストリーに寄り添うことによって、これまでの新宿の歴史書には、書かれなかったこと、見えなかったこと、地域の人々の本音も可視化することができる。

母は、80 年代以降から来日した韓国の学生に、こういった情景を話したことがある。とても想像できないと驚くとともに高齢者の語りから多くを学べることに感動していた。

喜怒哀楽が聞こえてくるような生活史の中に、時代に翻弄されながらも、自らの人生をたくましく生きる気概と主体性が伝わってくる。

地域の再生とネットワークの形成、そして変貌の速さに驚きながらも語り継ぐことの重要性が人々のこころに流れて、それが由緒となって地域を支えていることを読み取っていただければ幸いである。

<나의 내러티브 : 신주쿠구와의 관계>

신오오쿠보의 마음속 깊은 풍경
-어머니의 라이프 스토리의 곁에 다가서서-

카와무라 치즈코

◇ 마을 탄생의 원점 ◇

동경대공습이 계속 되던 중에서도 그리고 2011 년 3 월 11 일의 동일본대지진 직후에도 잔해 속에서 새로이 태어나는 생명이 있었다. 인간은 자기가 원하는 시간이나 원하는 장소, 원하는 부모에서 태어나고자 하는, 그러한 선택을 할 수 없다. 그렇기에 태어나 첫울음을 터트리며 만나는 부모와의 운명적인 접촉만큼 신비스러운 것은 없지 않을까?

출산은 어느 문화나 국적이나 민족이든지 보편적인 일이다. 그렇지만 임신을 하게 되는 환경, 문화적인 통념, 출산에 관련된 문화적인 의례나 관습 등은 각양각색이다. 함께 살아가는 라이프스타일의 시점으로 보면 함께 태어나는 라이프스테이지는 인생의 출발점이며 출산을 둘러싼 사회적, 문화적 배경은 나중의 정체성 획득에 큰 영향을 끼치게 된다.

동일본대지진으로부터 1 개월 뒤, 4 월달에 생일을 맞이하여 93 살이 되시는 어머니는 쯔나미와 지진으로 무너지는 집들이나 어쩔 수 없이 가족들과 헤어지는 사람들의 표정과 산처럼 쌓인 잔해를 티비를 통해 보셨다. 그 때 어머니의 마음 속에는 66 년 전, 신쥬쿠의 대공습을 떠올리셨다. 폐허가 되어 버린 신오오쿠보의 복구의 광경이 뇌리에 떠올라 아련했던 기억이 다시 떠오기 시작했던 것이다.

본고에서는 어머니의 라이프스타일을 함께 거슬러 올라가면서, 그리고 신오오쿠보의 고령자들에게 보고 들은 내용을 당시의 기억을 통해 신오오쿠보라는 지역이 전쟁중에 어떠한 경험을 겪었으며 잡초가 무성한 황야에서 얼마나 복구되었으며 재생했는가, 그러한 옛날의 체험과 풍경을 그려내었다.

◇ 전쟁중의 신오오쿠보 ◇

1942 년 신쥬쿠는 이미 B25 의 첫 공습을 경험한 뒤였다. 신오오쿠보역은 목조로 된 작은 역으로 표를 끊는 차장이 있었으며 주변은 녹색의 자연이 풍부한 조용한 마을이었다. 역의 플랫폼 길이는 지금의 절반 정도로 개찰구의 계단은 양쪽이 아니라 한 쪽 밖에 없었다고 한다. 플랫폼에 서면 오오쿠보역이 손에 잡힐 정도로 눈에 들어왔다.

신오오쿠보역 플랫폼의 바로 밑에는 20 평정도의 멋진 2 층 가옥이 있었다. 플랫폼에서 새하얀 테라스를 향해 말을 걸면 안에서 사람이 나오기 때문에 사람이 있는 것을 확인하고 개찰구로 내려올 수 있었다고 한다.

그 작은 집에서 나의 부모님은 선을 봤다고 한다. 당시는 남녀가 서로 만날 수 있는 기회가 적어서 한눈에 반한 부모님은 바로 결혼을 하고

싶었다고 한다. 하지만 소이탄[1] 이 언제 또 떨어질지도 모르는 전쟁중에 결혼식을 올리는 것 자체가 꿈이었다고 한다.

그러던 차에 와세다대학의 대강당을 사용할 수 있게 되어 1944 년 4 월 10 일 친적들이 모인 자리에서 결혼식을 올릴 수 있었다. 호화스런 신부 드레스를 기대했었지만 빌릴 수 있는 것은 한 벌 밖에 없었다. 신랑은 결혼식 당일 아침 타카다노바바에서 팥찰밥[2] 도시락을 사람 수만큼 사서 대강당으로 가져왔다. 당시에는 왠만해서는 먹을 수 없었던 팥찰밥을 본 친척들은 얼굴에 웃음꽃이 활짝 피우며 환호성을 질렀다고 한다. 신혼여행은 쌀을 직접 가지고 아타미(熱海)에서 일박을 했다.

"정말로 꿈과도 같은 날들이었어"

◇ 건물강제소개(建物強制疎開) ◇

토야마가하라(戸 山 ヶ 原)에는 군사시설도 많았었고 사격장이나 육군과학연구소도 있었다. 공습에 대비하여 선로 주변의 집들에는 전부 "건물강제소개"라는 명령이 떨어졌다. 자기 집을 스스로 해체하여 무너뜨리는 고통스런 작업에 카이세이(海 城)고등학교의 학생들이 동원되었다. 아버지는 그 2 층 가옥을 2 주에 걸쳐서 바퀴가 달린 큰 판으로 1 번지의 도로를 건너 이동시키는 데에 성공했다.

그 뒤에 아버지는 몽강의 선화(지금의 중국 하북성 장가구시 선화현)로 건축과장으로 단신부임하였는데 대부분의 남성은 전쟁에 불려 나갔었다. 남아 있는 여성들은 매일같이 방공연습과 소화훈련에서 활약하였다. 운동선수였던 어머니는 신오오쿠보 일대의 반장으로 지명받아서 철모와 장화를 신고 방공호를 만드는데 정신이 없었다고 한다. 기록에 의하면 1944 년 11 월 29 일 B29 80 대가 날라 와서 2 시간 정도 폭격을 가했다고 한다.

공포와 불안, 배고픔과 비위생적인 환경, 이산가족. 참고 견디는 날들의 연속이었다.

◇ 전쟁의 불길 속에서의 이동 ◇

동경대공습(1945 년 3 월 10 일)에는 사망자가 80 만명으로, 행방불명자를 포함하면 10 만 이상이 되었다. 불에 탄 가옥은 26 만 채로 추정된다. B29 가 출격한 수는 300 대 이상으로 동경에 도착한 것은 279 대라고 전해진다. 어머니는 2 층에 올라가서 동경대공습을 바라보았다. 시모다니(下谷)방면이 불바다가 된 모습을 보았다. 문방구점을 경영하던 Y 씨는 등에 가방을 메고 오오쿠보 거리에서 문화 거리를 달려 카이세이 고등학교로 도망가려던 중에

---

[1] 소이탄(燒夷彈)
목표물을 불살라 없애는 데 쓰는 포탄이나 폭탄 따위를 말하는 것으로, 적군, 도시, 구축물, 항공기 등을 태워 없애기 위해 쓰인다.

[2] 팥찰밥(赤飯)
팥을 넣어 만든 밥. 일본에서는 결혼식이나 입학식, 생일과 같은 날에 먹는 풍습이 있다.

가방에 불이 붙은 채로 달렸다고 한다.

신오오쿠보 일대는 불에 탄 들판처럼 되었고 남쪽은 이세탄(伊勢丹)과 미코시(三越)(지금은 신쥬쿠구 신쥬쿠)만이 남은 것럼 보였다.

서쪽은 성모병원(지금의 신쥬쿠구 나카오치아이) 만이 왠일인지 남아있었다. 사람들은 가까스로 목숨을 부지하여 방공호에 대피하고 있었다.

아버지로부터 "멍강은 평화롭고 넓은 곳이니까 10 년은 살 생각을 가지고 이 곳으로 와라. 북경까지 밖에 데리러 갈 수 없지만"이라고 쓰여진 편지가 왔다. 어머니는 동경을 떠나 큐슈를 향했다. 형이 우리를 데려다 주었다. 큐슈에서는 친척집에 머무르다가 4월 10일에 선화시에 도착하였다. 어버지와의 재회는 평생 잊지 못할 소중한 기억으로 남았다.

◇ 신쥬쿠의 어린이의 학동소개지 후쿠시마(福島)와 이바라키(茨城) ◇

5 월 독일은 연합국에 무조건적인 투항을 했고 6 월에는 학동소개가 반강제적으로 시작되었다. 지역의 국민학교의 어린이들은 후쿠시마, 이바라키, 토치기, 군마, 야마나시 등 절이나 여관에서 소개 생활을 보냈다. 예를 들면 토야마국민학교의 소개아동들은 군마현 헨죠우지(遍照寺)에서 가까운 내천에서 아침에 건포마찰을 하곤 했다.

지금도 마을회 주최로 열리는 축제에서는 당시의 소개 생활이 말로 전해지고 있다.

이산 가족, 전쟁중의 이동은 어린 아이들의 발달에 큰 영향을 끼쳤다. 필자는 국적이나 민족에 상관없이 모든 이들을 받아주는 마을 형성에 이러한 고난의 이동에 관한 기억이 숨겨져 있다고 생각하지 않을 수 없다.

◇ 패전과 폐허로부터의 재생 ◇

동경은 폐허가 되었다. 1946 년 1 월 1 일 천황폐하의 인간선언을 사람들은 어떤 심정으로 받아들였을까?

어머니는 귀국하라는 말을 듣고 혼자서 중국에서 귀국 수속을 밟았다. 3 월 25 일, 1 년 만에 재로 변한 일본의 땅을 밟고 큐슈의 친척집에 머물다가 시어머니와 와카야마(和歌山)에서 성묘를 마치고 그 길로 동경으로 향했다. 신오오쿠보 일대는 불에 탄 벌판으로 변했고 모처럼 이동시켰던 그 그리운 집도 B29 에 의한 융단폭격에 의해 타버리고 없어져 있었다. 주변은 잔해가 산처럼 쌓여 있었고 어머니는 그저 멍하니 서 있을 수 밖에 없었다. 신쥬쿠구 전역의 90%가 불에 타버렸으며 인구는 5 분의 1 로 감소하였고 판자집에 임시로 살고 있는 사람들이 넘쳐났었다.

아버지는 일을 마치고 나중에 5 월에 귀국했다.

스기나미(杉並)의 아는 사람 집의 한 켠에 임시로 살게 되었다.

◇ 배고픔 속에서 ◇

사람들은 타버린 들판을 일구어서 가정 농원을 만들었다. 하지만 바로

수확할 수 있을 리가 없었다. (사진 1)은 신쥬쿠구의 메지로촌 복구를 위한 사람들의 모습으로 냄비를 둘러싸고 담소를 나누고 있다. 어디를 가나 이러한 풍경으로 전쟁이 끝났다는 기쁨도 있었으며 사람들의 표정이 밝았다. 드디어 희망이 솟아 올랐다.

하지만 어떻게 먹을 것을 구했을까?

焼け残った家の門の前に集まり、鍋を囲んで談笑する人々。目白文化村でのひとコマ（新宿歴史博物館蔵）。

[사진 1] 공습으로 인해 타고 남은 집에 모인 사람들(신쥬쿠구 메지로 문화촌)
(신쥬큐역사박물관소장)

국민학교는 40 개교 중에 23 개교가 전부 타버렸고 5 개교가 부분적으로 불에 타버렸다. 푸르른 하늘 아래서의 수업이 시작되었다. 건강한 아이들의 표정은 밝고 명랑했다.

연합군에 의한 점령시대가 시작되었고 야마노테선 주변에는 GI 의 쵸콜렛이나 껌을 원하는 어린이들이 뛰어다녔다. 현재 마을회 임원을 맡고 있는 S 씨는 그 때의 껌이 얼마나 맛있었는지 아직도 기억하고 있다고 한다. 당시의 배고픔과 식량부족은 심각한 것이었다.

◇ 신쥬쿠의 에너지 뒷시장[3] ◇

쌀이나 야채를 어디서 어떻게 구했을까? 당시의 뒷시장에 대해서는 어머니의 일기에도 기록되어 있다. 에도동경박물관에는 신쥬쿠역 동족 출구에 있었던 뒷시장의 모형이 전시되어 있어서 전쟁직후의 사회현상을 들여다볼 수 있다.

1947 년 3 월 우시고메(牛込), 요쯔야(四谷), 요도바시(淀橋)가 통합되어 신쥬쿠구가 탄생되었을 때, 6.3 제도가 시작되어 교과서의 내용이 크게 바뀌었다. 모든 사람들이 허기진 배를 부여잡고 "민주주의"가 뭔지도 모르지만 새로운 시대의 막이 열렸다는 것을 느꼈다.

---

[3] 뒷시장(闇市)
물자부족으로 인해 물가를 통제하는 상황하에서 이루어지는 비합법적 시장경제원리에 의한 시장. 블랙마켓이라고도 불린다.

◇ 창업의 역사 ◇

옥수수가 울타리처럼 높아질 정도로 성장했다.

지역 주민들의 각자의 기술과 경험을 살려 기업을 일으키게 되었다. 아버지는 건설회사를 설립하여 1948 년 복구가 한창이던 때에 신오오쿠보에 자택과 사무소를 신축하셨다. 12 평이상의 집을 지으면 안 된다는 건축통제도 있었지만 현관 옆에 서양풍의 응접실이 있어서 일본식 방 2 개와 부엌, 식당이 있었다. 문화주택의 모델룸으로서 많은 사람들을 방으로 안내하였다.

"꼭 이 집과 똑같이 지어주세요" 라는 주문이 쇄도하였다. "지금은 지불할 돈이 없지만 언젠간 지불할게요" 라는 주문밖에 없었지만 그것을 받아 들일 만큼 기개가 넘치는 창업이었다.

집에서는 닭, 오나가도리(尾長鳥[4]), 개를 키웠다. 넓은 정원이 있었고 연못을 만들어 오리도 키웠다. 사진 2 는 오나가도리의 사진으로 배경이 된 곳이 신오오쿠보의 자택이다. 닭이 낳는 달걀이 귀중한 식량이었다는 것은 말할 필요도 없었다. 닭은 중요한 손님이 올 때에 밥상의 주역이 되었다. 어린 우리들은 두 다리를 잘라서 가지고 놀곤 했다.

어린이들은 "무궁화 꽃이 피었습니다." "깡통 차기" "고무총" 등, 특별한 도구 없이도 놀 수 있는 놀이에 흠뻑 빠져있었다. 큰 후키의 잎(蕗の葉)은 숨바꼭질할 때에 절호의 은신처가 되어 주었다. 햐쿠닌쵸(百人町)는 진달래 마을로 에도 시대부터 유명하였다. 큰 부용 꽃이 어우러져 만발한 모습이 나의 추억의 한 장면이다.

정원에는 큰 무화과 나무가 있었는데 가지 사이에 박스를 깔아서 어린이들의 놀이터로 쓰여지기도 했었다. 정월에는 사자춤이나 하시고춤(はしご踊り[5])을 하는 사람들이 모여서 축제도 성대하게 열렸었다.

아직 하수도도 전기제품도 없는 시대였지만 에너지가 넘치며 즐거운 추억이 끊이지를 않았다.

---

[4] 오나가도리(尾長鳥)
일본 고유의 닭의 한 품종.

[5] 하시고춤(はしご踊り)
일본의 전통적인 소방수들의 춤으로서 사다리 위에서 이루어지는 춤.

[사진 2] 그리운 신오오쿠보의 자택
(지금의 신오오쿠보역 근처)

◇ 롯데 껌 ◇

선로 건너편에는 롯데 껌 공장이 생겼는데 거기에서는 이루 말할 수 없는 맛있는 향기가 지역 전체에 퍼져 나갔다. 롯데 껌의 창시자는 한국 본토에서 온 유학생으로 와세다 실업 고등학교를 나와 고생한 경험이나 리어카를 끌고 다니며 비누와 껌을 팔며 다니는 모습을 기억하고 있는 사람이 많았다.

마을회에서는 아직도 그 사람을 존경의 마음으로 이야기하는 사람들이 많다. 츄잉껌의 향기는 야마노테선의 전차 안까지 퍼졌었다. 주변의 주부들은 종이박스에 껌이나 캬라멜을 넣어 자택에 가져와 작은 포장지에 싸는 일을 했다. 점점 한국 사람들이 이주해오기 시작했다. 오오쿠보거리를 둘러싸며 카부키쵸 방면으로 향하는 지역에는 제주도로부터 이주해 온 한국인들이 늘어나고 있었다.

◇ 함께 살아가는 마을 ◇

오오쿠보역 근처에 있는 요도바시교회는 미국의 교회와 같이 소박하면서도 새로운 광경을 자아냈다. 옥수수 밭이 풍성한 가운데 3 살이 된 나는 일요일에는 할머니의 손에 이끌리어 예배를 드리러 교회를 다녔었다. 적국이었던 미국은 이제는 함께 기도를 드리는 이웃이 되었고 많은 선교사들이 이주해 왔었다. 지금의 문화거리 근처에 있었던 그 집은 미국풍의 부엌문에 망사 문이 달려 있었고 천정이 높은 우아한 집이었다. 나는 영어로 말을 걸어 보고 싶어서 그 집의 문을 두드려, 친구가 되었고 애보는 일을 자청하기도 하였다. 가족 전체가 친하게 지내는 계기가 되었다.

“귀축미군(鬼畜米兵[6])”과도 같은 시대는 코페르쿠니스적 전환[7] 과도 같이 180 도로 바뀌었는데 마을은 부흥과 함께 평화의 마음이 퍼져 적과 아군이라는 생각은 없어지고 즐거운 교류가 시작되었던 것이다.

이상으로 어머니의 기억을 더듬어 올라가서 전쟁후의 황야와 부흥을 향한 신오오쿠보의 옛 풍경의 한 장면을 그려내 보았다. 라이프 스타일에 다가서서 나란히 걸어가는 것을 통해 지금까지 신쥬쿠의 역사서에는 쓰여지지 않았던 사실, 보지 못했던 사실, 지역 주민들의 본심까지도 눈에 보이듯이 그려낼 수 있었다.

어머니는 80 년대 이후부터 일본에 온 한국의 학생에게 이와 같은 정겨운 풍경을 이야기 해 준 적이 있다. 정말로 상상도 할 수 없을 만큼 놀라면서 고령자의 이야기에서 많은 것을 배우는 것에 감동하고 있었다.

희로애락이 들려오는 듯한 생활사 속에서, 시대에 휩쓸려 가면서도 스스로의 인생을 힘차게 살아가는 기개와 주체성을 느껴졌다.

지역의 재생과 네트워크의 형성, 그리고 빠르게 변해가는 스피드에 놀라면서도 대대로 전해져 오는 이야기들의 중요성이 사람들의 마음 속에 흘러 퍼져, 그것이 마을의 유래가 되어 지역을 유지하고 있다는 것을 느낄 수가 있었다.

---

[6] 귀축미군(鬼畜米兵)
제 2 차세계대전 중에 일본국내에 퍼진 일종의 슬로건과 같은 것으로 미군은 여자는 강간하며 남자는 죽인다는 소문이 퍼졌었다.

[7] 코페르쿠니스적 전환
코페루쿠니스가 그 때까지 지동설이 지배적이었던 세상의 상식을 깨고 지동설을 주장한 역사적인 사실을 빗대어 지금까지의 생각이나 사상이 180 도로 바뀌는 것을 말한다.

＜インタビュー　1＞

C さん（30 代、女性）「今が人生のピーク」

2010 年 3 月 1 日、ソウル出身、専業主婦、日本在住 9 年
インタビュアー：ソン・ウォンソク

◇　結婚を契機に来日　◇

家族は都内の私立大学の助手である夫と 6 歳の娘、3 人家族。韓国には自営業を営む両親と会社勤めしている兄、弟がいる。2002 年 5 月に留学生だった夫（当時大学院修士課程）と結婚を契機に来日した。1999 年に大学を（数学科）卒業し、会社勤めや、放課後教師（日本の学童に類似する）をやった。来日した当時は 1 年だけ生活をするつもりだったが、もう 9 年目を迎える。韓国の家族も 1 年と思っていたが、こんなに長くなり、「早く帰ってきて」と言われる。自分にとって日本は初めての海外生活だ。両親は海外旅行はたくさんしたが、生活したことはない。お父さんが厳しくて大学の時に門限が 9 時で、旅行どころか合宿もいけなかった。だから、日本に来て自由な生活を謳歌しているのでとても良い。

1 年間遊ぶつもりだったので、日本語も全然勉強しないでひらがなも分からない状態で日本に来た。日本については首都が東京である程度の学校で習ったこと以外は何も知らなかった。教科書に出てくる怖い国というイメージもあって、差別もあるのではとはじめは怖かった。来日してからは大学の寮で生活していたが、その寮を出て民間のアパートに移るときに不動産屋で「大家が外国人は…」と断れたこと以外は、あまり差別のようなことを経験した覚えはない。時期が 2002 年ワールドカップもあり、その後「冬のソナタ」で韓流ブームもあって、雰囲気が良かった。

初来日は観光ビザで来た。1 年間は 3 ヶ月ずつ往復して、日本にいる間日本語学校に 2 ヶ月通った。その後は今住んでいる都下の市の地域センターの日本語教室で週 4 時間勉強した。日本語学校より会話練習の機会が多く勉強になった。そこで日本人の友達もできた。当時韓国に対する関心が高かったので、韓国について聞いてくる人も多く、そのうち韓国料理や韓国語を教える機会もあった。当時できた友達は 40～60 代の女性が多かった。とても仲良く楽しく過ごした。地域の日本語教室で日本語能力試験を受験する雰囲気もあって、妊娠してから胎教として勉強でもしようと試験勉強をして、来日 1 年半で 1 級に合格した。

一つ印象に残ることは、日本に来た当時、夫が住んでいたアパートで 1 週間ほど過ごしたが、古い木造で手巻き点火式のお湯沸かし機はショックだった。先進国といわれる日本でこんな生活をしているなんて想像もできなかった。それから新築された大学の国際寮の家族室に移ったが、韓国と比較すると普通なのに、最初の木造アパートに比べると宮殿のようだった。国際寮に入ってからはそこに住んでいる奥さん達と友達になった。家にいるよりは外に出て人とつきあうのを好む性格なので、たくさん友達ができた。

◇　周りに助けられる子育て　◇

娘は韓国で出産し 2 ヶ月後日本に戻った。娘が 3 歳になって幼稚園に通い始める前までは家で子供と二人だけで過ごしたのでとてもつらかった。体の調子が悪くても子供をみてもらえる人がいなくて大変だった。その時が日本の生活の中で一番つらかった。その時、知り合いの紹介で地元の育児クラブに入った。週に一度集まって市の施設の部屋を借りて保育士に子供を預けて母親達は料理やおもちゃ作り、時には育児について先生を呼んで話しを聞くなど、とても有意義で楽しい時間を過ご

した。はじめは 6 人から後に 12 人まで増えたが、幼稚園に入ると自然に脱会する。市の公民館でリトミックや体操など親子のための多様なプログラムがあるのも育児クラブのお母さん方から情報を得ていろいろ参加した。実はそのようなプログラムを知らない人が多い。育児クラブに入ったので、情報を得ることができた。

一人子育ては長短がある。自分の教育観で好きなように育てられるのは良い点だが、やはり何かあるときに子供を預けられないのが困る。24 時間子供と一緒にいないといけないのでストレスもたまる。発散できないとそれが子供に向けられることもあるので困る。だが、日本は子育て環境が良い。韓国で子育てをやったことがないので比較はできないが、ここは補助金もあるし、子供をつれて出かけても子供関連の施設も整備されているし、これは良い点だ。出産してからは市から相談員が来ていろいろ教えてくれた。何かあったときに利用できる施設の情報を教えてくれたし、安心させてくれた。周りで産後鬱になる人もいると聞く。自分はつらかった記憶もあるがもう忘れた。今から考えると子供が赤ちゃんだった時が良かったなと思っている。

幼稚園選びは育児クラブの友達などから情報を得て選んだ。子供が幼稚園に入ってから学習塾の掃除パートの仕事を始めた。午前中 1 日 2 時間程度週 6 日やっている。終わると買い物したり友達とランチしたりする。幼稚園は 2 時に終わる。バスもあるが、迎えに行く。行くと他のお母さん達と会って情報交換もできる。市から補助がでるので幼稚園費の 3 分の 2 はそれでまかなえ、あまり負担は感じない。週 2 回お弁当を持たせるが、はじめは他のお母さん方がとてもかわいく作って、それが負担だった。でも年中になると冷凍食品も使う。他のお母さんもみんな同じ。

子供が生まれて 1 年間は大変だったが、去年から夫が大学で博士課程に在籍しながら契約職の助手になり韓国語講師もやっている。パートの仕事もあるので、経済的に問題はない。「今が人生のピークのようだ」。

今年子供が小学校に行ったら世話が減るので、何かやりたいことをやってみようかと思っている。具体的なことはないが、勉強をしてみようか、以前やったことのある韓国料理を教えて稼ぐか、いろいろ考えている。

◇　子どもの教育が悩み　◇

夫は韓国に帰りたがる。ところが、子供が今年小学校に入学するので悩んでいる。生まれてから日本の幼稚園に通い、友達も日本人ばかりなので、途中で韓国に帰ったら、うまく適応できるかどうか。子供に韓国人であることをどう教えるかも悩み。韓国では韓国に対して息をするように教育を受けるが、娘は日本の子供が息をするように受け入れる日本を、同じように受け入れてきた子なので、どうすれば良いか悩んでいる。歴史の問題もあるだろうし…。いざ韓国に帰ろうとすると、韓国の教育の現実に耐えられるかが一番大きい。韓国に帰った友達をみるとうまく適応できない子もいる。韓国は教科学習の面で早い。日本ではみんなが知らない事を前提にはじめから教えるが、韓国だと 5 まではやってきただろうと、6 から教える。韓国に帰った友達から、子どもが「日本から馬鹿が来た」と言われたことがあると聞いた。言葉もうまくできないので、特に小学校は仲間に入れてくれないようだ。

娘は韓国語があまりできない。生活会話程度はできるが、韓国語で話しかけると日本語が帰ってくる。1 年前に韓国人の友達が来て韓国語がうまくなったが、学校で使う学習用語は全然できない。数も数えられない。もし韓国に帰るならば、娘の事が一番心配。小学校の時期は教育もされてない段階で、動物的で露骨ないじめがあるので、傷つきやすい。できればこの時期を避けたいが、中高になると教育のレ

ベルが違うのでまた無理かもしれない。どうすれば良いか悩みだ。
　最近、娘が韓国を意識し始めた。韓国と日本がサッカーをやって日本が勝ったら、幼稚園でみんなと一緒に喜んだようだが、「お父さん、お母さんは日本に住んでいるのに、なんで韓国を応援するの？」と聞かれた。自分は日本に住んでいるし、友達もみんな日本人で、韓国語もできないのに、なぜ自分を韓国人と言うのか、と聞かれた事がある。その程度だったが、今はお父さん、お母さんが韓国人で、何かの違いを感じているようだ。韓国人の友達が幼稚園に来て、二人で韓国語を喋ったり、日本語が全然できない韓国人の友達に韓国語で言ってあげたりしながら、少しずつ違いを感じ始めたようだ。いまは周りの子が娘に対して「おまえ、韓国人だろう」と言っても、言う子も聞く娘もそれに対する認識がないのでそれが良い悪いといったところまではいかないと思うが、小学校に行ったら違うのではないかと心配している。娘にとって日本はとても良い国で母国のような感覚なので、特に歴史問題などに対してどう説明してあげれば良いのか悩む。夫が歴史を勉強する人なので、うまくやってくれるだろうと期待している。日本の教育は子供には良いと思うが、やはり歴史問題が一番引っかかる。
　だが、自分は日本に来て両方を比較できるようになって良かったと思う。微妙な関係の両国を理解できるようになった。同じように、娘にとってもそれは良いだろう。抑圧されてきた在日とは違って、別の考えを持つのではないか。
　家で韓国語を教えようとしているが難しい。韓国から送ってもらった本や資料でやってみたがうまくいかない。自分と娘は日本語を受け入れる感覚が違う。自分は外国語として覚えて使うが、娘は自然と分かる。自分には聞き取れない事も娘は聞き取れる。自分が日本語を習うことと同じように、娘は韓国語を学ばないといけない。とても難しい。
　小学校選びに韓国学校も考えたが、生活圏が違うし、学習の熱も違うらしいのでやめた。経済的要因、韓国学校のお母さん達の教育熱、いろいろあるが、日本に住みながらわざわざ韓国学校に行かせるのもそうだし、一番はやはり生活圏を新宿に移すことがいやだった。自分も娘も今住んでいるところになれているし、友達も多く、まるで故郷だ。
　大久保には日本人のお母さん達と食事しに行く。自分のためにいくのは希。何か用事があって都心に行くついでに食事しに立ち寄る。家では韓国料理しかしない。自分ができるのがそれだけだから。材料は通信販売で買ったり、韓国から送ってもらったりしている。昨年までは旧正月の時に友達が集まって食事したり、遊びに行ったりしたが、今年はできなかった。日本では普段通りの生活をしているので難しい。

＜インタビュー　2＞

ヒロさん（30 代・男性）　「韓国でできないことをしましょう」

2010 年 4 月 11 日、京畿道出身、大学院生、日本滞在歴 4 年
インタビュアー：若園雄志郎

◇　日本に来るまで　◇

ヒロさんは韓国の大学で英語関連の学部を卒業した後、専門学校で語学講師・マネージャーをやっていた。マネージャーというのはヒロさんによれば韓国語も出来て英語も出来る人で、外国人生徒に何か問題が起きた時に相談や調整を行うものだという。ここでは「西洋人と一緒に生活して、留学のかたちで国際的な気持ちでやったから、あんまり大変なことはなかった。新鮮で、自分は他の人が出来ないことをやったからちょっと期待があった」という感じだったとのことであった。

◇　来日してから現在　◇

その後「新しい挑戦」として来日し、日本語学校でひらがなから学んだ。来日にあたっての手続きや住居探しなどは業者に任せず全て自分一人で行ったという。それは「自分はおしゃべりで、人と人のつながりとか人と会うことが好きだから、自分がひとつひとつ調べてるその過程も自分にとっては大事な部分じゃないか」「何でも自分一人でやろうと思えばできないことはない」と述べていた。自分の手で全て行いたいという意志が感じられるといえるだろう。同時に「どこに居たって人間が住む場所は一緒」とも述べていたが、これは日本以外にも多くの国々を旅した経験が生きているとのことであった。

来日した際は食堂で厨房手伝いをしていた。しかし、このような体力の要る仕事では勉強に影響してしまうと考え、現在では社会科学系の大学院に進学したこともあり体より頭を使う仕事として英語や韓国語の個人レッスンをやっている。そうすることで自分の語学スキルも維持できているという。

◇　将来について　◇

英語のスキルを生かし、教師など教育関係の仕事に就きたいと考えている。教えることができるのであれば小学校でも大学でもかまわないという。自分の力が生かせれば、日本も韓国もこだわりはなく、アメリカなどでもいいそうである。そのため、日本に定住する、あるいは韓国に帰国するということも、どこで自分の力が生かせるかによって選択は変わってくると答えていた。

◇　新宿について　◇

ヒロさんは「三角形をつくってみる」と述べていた。これは、住む場所、仕事をする場所、学校、の 3 ヶ所を結んだときにできる三角形が小さい程いい、ということだという。それぞれが遠ければ遠い程無駄が多いのである。大久保は韓国の食堂が多いからアルバイト先が多い、近隣に学校も多くある。それを考えたときに家賃が少々高くてもその三角形を小さくできるようなところ、つまり大久保ないしは新宿が最も合理的ではあると考えているという。

しかし、「最初は新宿・大久保にコミュニティを求めて行くが、1 年程度でやっぱりここは日本だから、韓国人だけのつながりだけのためにここに居る必要ないじゃないって思う」「最初は、弱い時は、大久保に入って、ちょっと自分が強くなった

ら、もっと他の場所にちょっと増やす」とも答えており、常に人との関係を求めて発展させていこうとしているのである。

◇　日本について　◇

気になることとしては相手が西洋人か、韓国人や中国人かによって日本人の態度が全く違うことだという。つまり西洋人に対しては自分たちが英語ができないことを申し訳なく思っているのに対して、韓国人や中国人に対しては彼らが日本語ができないことや不充分な日本語であることを見下している部分があるように思うとのことであった。また、日本では書類が多いこと、仕事などの手順について間違いを許さないことなど、「情がない感じ」であることについても、もっと人とのつながりを大切にした方がいいと感じているようである。

さらに、日本語の「ちょっと…」という表現についても、はっきりと意見を表明しないことについて違和感があるという。例えば日本人を食事に誘おうとしたときに相手が「ちょっと…」と答えたとき、それは「今は行けない」なのか、それとも「あなたとは行かない」なのかがわからないのである。「あなたとは行かない」のであればはっきりそう言ってくれた方が、次回また同じ事をしなくて済むのに、と感じているとのことである。

日本社会に対して一言を求めたところ、「自分はまだまだ頑張っている途中なので、社会の一人として自分がやる役割をがんばって生きていこうと思う」と答えた。ヒロさんはまだまだ日本社会について知らないことがあるため、現時点では明言できないということだと感じられた。

<인터뷰 2>

히로씨(남성) "한국에서는 하지 못 하는 것들을 해봅시다."

2010 년 4 월 11 일, 경기도출신, 대학원생, 일본체재 4 년
인터뷰어 : 와카조노 유우시로

◇ 일본에 오기까지 ◇

히로씨는 한국의 대학에서 영어 관련 학부를 졸업한 뒤, 전문학교에서 어학강사와 매니저를 했었다. 히로씨에 의하면 매니저는 한국어와 영어가 둘 다 가능한 사람으로써 외국인 학생이 뭔가 문제가 생겼을 때 상담이나 여러 가지 조절을 하는 역할을 담당한다고 한다. 거기에서는 "서양인들과 같이 생활하면서 유학 생활처럼 국제적인 느낌을 가지고 했었기 때문에 그다지 힘들지 않았다. 신선했었고 내가 다른 사람들이 못 하는 것들을 했기 때문에 조금은 기대감이 들었었다" 라는 느낌을 항상 받았다고 한다.

◇ 일본에 오고 나서부터 현재까지 ◇

그러한 뒤에 "새로운 도전"을 위해 일본에 오고 일본어학교에서 히라가나부터 배우기 시작했다. 일본에 오기 위해 밟아야 하는 수속이나 집구하기 같은 것들은 업자에게 맡기지 않고 자기 스스로 했다고 한다. 그는 "나는 수다쟁이고 사람과 사람 사이의 끈, 사람들과 만나는 것이 좋으니까 내가 하나씩, 하나씩 알아보는 그 과정도 중요한 부분이 아닐까요.", "뭐든지 자기 혼자서 하려고만 한다면 안 되는 것이 없어요." 라고 말했다. 자신의 손으로 뭐든지 해보고 싶다는 의지가 느껴졌다. 또한 "어디에 있더라도 사람 사는 곳은 똑 같은 것 같아요." 라고 했는데 이것은 일본 이외에도 많은 나라들을 여행한 경험이 있기 때문에 가질 수 있는 생각이었다.

처음 일본에 왔을 때는 시당에서 주방 보조를 했었다. 하지만 체력이 필요한 주방 보조와 같은 일은 공부에 영향을 끼친다고 생각한 것도 있고 지금은 사회과학 쪽의 대학원에 진학한 것도 있고 해서 몸보다 머리를 쓰는 영어, 한국어의 개인 레슨을 하고 있다. 이러한 일을 하면서 자신의 어학 능력도 유지하고 있다고 한다.

◇ 장래에 대하여 ◇

영어 능력을 살려서 교사와 같은 교육에 관련된 일을 하고 싶다고 한다. 가르칠 수만 있다면 초등학교라도, 대학교라도 상관없다고 한다. 자신의 능력을 발휘할 수만 있다면 일본이나 한국이나 어느 쪽이라도 고집하지 않으며 미국이라도 좋다라고 말했다. 그렇기 때문에 일본에 영주하느냐 아니면 한국에 돌아가느냐 라는 선택도 어디서 자기의 능력을 살릴 수 있느냐에 따라 달라진다고 대답했다.

◇ 신쥬쿠에 대하여 ◇

히로씨는 "삼각형을 만들어 봐요" 라고 말했다. 이것은 사는 장소, 일을 하는 장소, 학교 라는 세 군데를 연결했을 때 생기는 삼각형이 작을수록 좋다라고 한다. 각각의 장소가 멀리 떨어져 있으면 있을수록 쓸데없이 시간이나 체력을 소비한다고 한다. 오오쿠보에는 한국 식당이 많아서 아르바이트를 구하기 쉽고

근처에 학교도 많이 있다. 이러한 것을 고려해 보았을 때 월세가 조금은 비싸도 삼각형을 좁힐 수 있다는 점, 즉 오오쿠보라던지 신쥬쿠가 제일 합리적이라고 생각한다고 언급했다.

하지만 "처음에는 신쥬쿠와 오오쿠보에 커뮤니티를 위해서 가지만 1 년 정도 지나면 여기는 일본이니까 한국인들과의 모임을 위해서만 여기에 있을 필요는 없지 않을까 라고 생각해요.", "처음 약할 때에는 오오쿠보에 갔다가 조금 강해지면 조금 더 다른 장소를 옮겨가는 거죠." 라고 말하는 히로씨는 항상 사람과의 관계를 위해 발전해 가고 있는 것이다.

◇ **일본에 대하여** ◇

일본인은 상대가 서양인이냐 아니면 한국인, 중국인이냐에 따라 그 태도가 전혀 다르다는 점이 특이하다고 한다. 서양인에게는 영어를 못 하는 자기가 미안하다는 듯이 대하면서 한국인이나 중국인에게는 그들이 일본어를 못 하는 것이나 일본어능력이 부족한 것에 대하여 깔보는 경향이 있는 것 같다고 한다. 그리고 일본에서는 무슨 일을 하던지 서류가 많은 것과 일할 때 그 순서를 틀리는 것에 대해 용납하지 않는 것 등과 같은 "정이 없는 느낌" 에 대해서도 사람과의 연결고리를 더욱 소중히 하는 것이 좋지 않을까라고 느끼고 있는 것 같다.

더욱이 일본어의 "ちょっと…" 라는 표현에 대해서도 확실히 자신의 의견을 나타내지 않는 것 같아서 위화감을 가지고 있다고 한다. 예를 들면 일본 사람을 식사에 초대하려고 했을 때 상대방이 "ちょっと…" 라고 말하면 그것이 "지금은 갈 수 없어" 라는 것인지 아니면 "너랑은 가지 않겠어" 라는 것인지 잘 모르겠다는 것이다. 만약에 "너랑은 가지 않겠어" 라는 것이라면 다음에도 똑 같은 일을 되풀이 하지 않아도 되는데 라고 늘 생각한다는 것이다.

일본 사회에 대하여 한마디 부탁하자 "자기는 아직 열심히 하는 도중이기 때문에 사회의 일원으로서 자기가 할 수 있는 역할에 최선을 다해 살아가겠다" 라고 대답했다. 히로씨는 아직 일본 사회에 대하여 모르는 것이 많기 때문에 지금은 확실히 이야기 할 수 없다는 뜻이 아닐까 라고 느꼈다.

＜インタビュー　3＞

J さん（40 代・女性）「日本で人生のチャレンジをする」

2010 年 6 月 2 日、ボンファ出身、パート勤務・韓国語教師、日本在住 15 年目
インタビュアー：藤田ラウンド幸世

◇　略歴と家族　◇

J さんは 1969 年生まれで、4 人きょうだいの 1 番目。釜山に近いとボンファで生まれ、後にソウルに移る。大学はソウル近郊の大学で経営学科専攻、副専攻は教育学で、選択科目で日本語を勉強する。

卒業後、貿易会社に就職し、3 年間働いた後に、日本に留学。初めは 1 年間勉強してから帰国をするつもりでいたが、日本語学校の後に、大学の研究生として 2 年間大学院進学に向けて、児童心理学を勉強する。しかし、結果として、大学院は選ばず、就職をする。

来日後は、現在にいたる 15 年間、新宿区に住み続ける。学生に始まり、韓国企業へ就職、日本の企業への転職、結婚、出産、子育てと自分の生活を築く。現在は、二人の子どもの子育てと同時に、パートで仕事をしながら、さらに、韓国語教師の国家資格をとるための勉強もしている。

◇　ぎりぎりの生活をした日本での留学生活　◇

韓国の大学では語学はそれほど好きではなく、数学に自信をもっていたので、理系の経営学を専攻し、副専攻に教育学をとっていた。大学の選択科目として、日本語をとったので、在学中、集中的に勉強をし、日本語能力試験 1 級に合格をした。それもあって、貿易会社で 3 年ほど働いた後、27 歳のときに日本留学を決心する。「やっぱり、人生には波があるじゃないですか。会社に勤めたくない、結婚もしたくない、なんか新しい人生のチャレンジをしてみようっていう、そういう時期だったんです。」

親戚もいるわけではなく、お金は学費と当面の生活費しかなかったが、「まあ、やってみよう」と来日し、以後、日本語学校、大学院研究生として苦労をすることになる。水道の水にご飯を入れて食べながら学校に通っていた時期もあった。しかし、今ではその時期を振り返って、「そういう経験があったから、本当に日本に耐えることがちょっと、こういうと変なんですが、根強く耐えることができたわけです。悔しいんですね、せっかくこうやって来たのに、そのまま何もなしで帰るということが。」

経済的にぎりぎりの生活の中で J さんを親身になって助けてくれたのが同じ韓国出身の日本語学校での先輩たちだった。先輩たちに助けられ、一緒に教会に通うようになり、「神様の愛ってこういうものだ」と実感して、クリスチャンとなる。日本で通っている教会は、韓国人も多く、韓国語で話すこともできる。

日本で初めにアルバイトをしたのは焼肉屋だった。働き始めて一カ月後に、この焼肉屋の家族が夜逃げをしたので、アルバイト代をもらえず、残っていた鍋とか電気炊飯器をもらってきた。6 ヶ月後にようやく別のアルバイト先を見つけることができた。その職場では日本人の同僚と仲良くなり、一人の日本人の同僚とは現在でも付き合う長年の友人となっている。

◇　大学院進学か、就職かの選択　◇

来日直後に入った日本語学校では、日本語能力試験の 1 級に合格していたこともあり、上級クラスに入れられる。しかし、上級クラスに入った当初は、先生の言っていることもよく理解できず、初めの 6 カ月は授業についていくのに苦労した。先生から「韓国に帰った方がいい」と言われたこともあるが、これだけ苦労をしてきたのだからと、一生懸命踏ん張り続けた。日本語学校に 1 年間在学した後は、児童心理学を専門として勉強のできる、国立大学の研究生となった。その大学は家から近く、自転車でも行けた。

大学院で児童心理学を専攻するためには、児童心理学の基本を学ぶ必要があった。J さんの学部の専門分野は経営学だったため、研究生として在学できる 2 年間を使って、基礎を学び、大学院に備えるつもりだった。ところが、いよいよ大学院に進学できるかというときに、別の選択肢が出てきた。韓国の大手企業の日本支社から仕事がはいり、結果としては大学院を受けることはしないで就職をすることにする。就職後、まもなく、韓国の経済危機が起こり、勤めていた会社は日本から撤退することになり、会社の紹介で今度は日本の会社に転職をすることになった。このときは 31 歳になっていた。

◇　フルタイムの会社員として日本企業で働く　◇

日本の企業での新たな仕事について、J さんは、「私にとってはすごい勉強になったところですね。ただお金を稼ぐだけではなくって、ほんとにもう日本語もそうだし、日本語の文化に接することができる、幅広く経験できる、お金を稼ぎながら勉強にもなったという、貴重な経験でした」という。

入社直後は、会社の 97%ぐらいは日本人が占める職場だった。上司である日本人の部長は自分よりも 3 歳年下で、職場では J さんは年齢的には若い方ではなかった。営業マンが多い部署に事務の女性として J さんが配置されたが、職場全体でいじめられたこともあった。何日も涙を流しながら会社に通い、後から聞くと周りの人もそのときに辞めるかと思ったくらい、当時はつらい時期でもあった。しかし、そこで辞めると「私が負ける」と、J さんは結局、頑張り続けた。

職場は日本全国各地から電話で顧客へサービスを提供していたので、日本語の標準語だけではなく、大阪弁や東北弁などの方言の人とも対応しなければならなかった。ある時、「すいません、もう一度お願いします」と言った時に、「もう帰れよ！」と怒鳴られたこともあった。また、韓国語を使うお客から電話がかかってくると、いつもは冷たい職場の人が、「J さん、お願いします」と頼んでくる。J さんは職場では、20-30%くらいは韓国語を使っていた。

◇　結婚、出産、そして子育て　◇

J さんは日本で通っていた教会で知り合ったご主人と 34 歳のときに結婚。ご主人は韓国人なので、二人の結婚式はソウルで行った。ご主人の故郷では三日間に亘る独特の文化があるということだったが、それを二人の場合は「一日ちょっと」で披露宴をしてきた。

35 歳のときに一番目の子どもを出産。結婚をしたときはまだフルタイムで働いていたが、出産の一か月前に退職をした。出産後、一年間は体調を崩し、子育てをしながら休養をした。赤ちゃんが生まれたときは、名前は二人で考え、洗礼は現在通

っている日本の教会で行った。

家族を持ち、後に二番目の子どもが生まれたころには、「たまに韓国に行きたいと思うときもあるんです。もし、結婚前に韓国に帰っていたら、韓国で住んだと思うんですけど、もう日本で子どもを産んだので、それからはたまに行くのはいいんですが、まあ、ここが私の住む場っていうか、韓国に帰って住むのは、まだまだ後になるってなんとなく思っています。」

J さんにとって、母国を離れ、新しい人生にチャレンジするということは、苦労の連続だったが、それを乗り越え、安定した基盤を築いたのは留学先の日本だった。今は日本の方が「楽」で慣れている。逆に、たまに韓国に行くと、家族に会えることはうれしいものの、韓国社会の変化の激しさに戸惑うことも多い。例えば、携帯電話やインターネットなども韓国の普及したのは J さんの来日後なので、J さんにとっては携帯やインターネットは日本での方が馴染んでいるためか、韓国ではついていけない。

J さんは、出産後、フルタイムからパートタイムに仕事を切り替え、一人目の子ども一歳になる頃から働き始めた。二人目の子どもを出産後、現在では、パートの仕事と派遣という形で韓国語を教えて仕事と二つの仕事をしている。子どもがまだ幼いので自分の時間が増えたときには自分のやりたいことを積極的にやりたい。

◇　子どもたちと将来　◇

韓国語を教える仕事は自分に向いていると思うので、韓国語教師の国家資格がでるサイバー大学の三年生に編入し、子どもたちが寝静まった夜中に勉強もしている。来年は一番目の子どもが小学校に上がるので、現在、子どもの教育についても真剣に考えている。子どもたちは地元の保育園に通い、土曜日に教会で行っている韓国語の民族学校みたいな教室に通っている。日本語の方が上手だが、家庭では最近、意識的に母親の自分が韓国語を使っている。子どもを、教育中心の韓国人学校か、ゆっくりと自分のペースで勉強して自由に勉強できる日本の学校か、どちらに行かせるか。ただ、韓国人なので、日本に住んでいても韓国の歴史を知ってほしい。子どもたちには、韓国人として誇りをもって日本に住んでほしいという希望が親としてあるという。

<인터뷰 3>

J 씨 (40 대, 여성) "일본에서 인생의 도전을 하다"

2010 년 6 월 2 일, 봉화출신, 파트근무, 한국어강사, 일본체재 15 년
인터뷰: 후지타 라운드 사치요

◇ 약력과 가족 ◇

J 씨는 1969 년에 4 형제 중에 첫째로 태어났다. 부산에서 가까운 봉화에서 태어나서 그 뒤에 서울로 옮겼다. 서울 근교의 대학교에서 경영학과를 전공하여 선택과목으로 일본어를 배웠다.

졸업 후에 무역회사에 취직하여 3 년 동안 일하고 일본으로 유학을 왔다고 한다. 처음에는 1 년 동안 공부하고 귀국할 예정이었지만 일본어학교를 마치고 대학원 진학을 위해서 2 년 동안 대학교의 연구생으로서 아동심리학을 공부했다. 그러나 결과적으로 대학원을 선택하지 않고 취직을 하게 된다.

일본에 오고 나서부터 15 년간 신쥬쿠에 살고 있다. 학생시절부터 시작하여 한국기업에 취직, 일본기업으로 직장을 옮기게 되고, 결혼을 하게 되며, 그리고 육아와 자신의 생활을 만들어갔다. 현재는 두 아들의 육아와 파트 아르바이트를 하면서 한국어강사를 위한 국가자격시험을 앞두고 공부를 하고 있다.

◇ 경제적으로 늘 아슬아슬했던 일본의 유학생활 ◇

한국의 대학교에서는 어학에 그다지 관심이 없었고 수학에 자신이 있었기 때문에 이공계 쪽의 경영학을 전공하고 부전공으로 교육학을 하고 있었다. 그리고 선택과목으로 일본어를 배웠기 때문에 열심히 공부하여 재학중에 일본어능력시험 1 급에 합격하였다. 일본어능력시험에 합격한 것도 있고 해서 3 년 동안 무역회사에 일한 뒤, 27 살 때에 일본유학을 결심하게 된다. "역시 인생에는 파도가 있지 않습니까? 회사 다니고 싶지도 않고 결혼도 하고 싶지 않고, 뭔가 새로운 도전을 해보고 싶다는… 그런 시기였던 것 같아요."

친척이 있었던 것도 아니고 학비와 당분간의 생활비 정도 밖에 돈이 없었지만 "뭐 한번 해볼까" 라는 마음으로 일본에 와서 일본어학교의 학생, 그리고 대학원의 연구생으로서 고생이 시작되었다. 수돗물에 밥을 말아먹으며 학교를 다닌 적도 있었다. 하지만 그런 생활을 뒤돌아 보면서 "그런 경험이 있었기 때문에 정말로 일본에서 견딜 수 있었던 것 같아요. 어떻게 보면 이상한 말이지만 이렇게 까지 고생했는데 그냥 돌아가기엔 억울하고 분해서 더욱더 끈질기게 견딜 수 있었던 것 같아요." 라고 말했다.

경제적으로 아슬아슬한 생활을 하는 중에 같은 한국출신의 일본어학교 선배들이 친절하게 도와주었다고 한다. 선배들이 도와주고 함께 교회도 나가게 되어 "하나님의 사랑은 바로 이런 것이다" 라고 실감하여서 기독교인이 되었다. 일본에서 다니는 교회는 한국인도 많아서 한국어로 이야기를 할 수도 있었다.

일본에서 처음으로 시작한 아르바이트는 불고기 가게였었는데 그 주인집 가족이 밤에 도망을 가버려서 아르바이트 월급도 받지 못하고 남은 냄비라던가 전기밥솥 같은 것을 가지고 왔었다고 한다. 6 개월 뒤에 겨우 다른 아르바이트를 구했는데 거기에서는 일본인 동료와 친해져서 그 중에 한 명은 지금도 자주 만나는 오랜 친구가 되었다고 한다.

◇ 대학원에 진학하느냐, 취직하느냐의 선택 ◇

일본에 와서 처음 다닌 일본어학교에서는 일본어능력시험 1 급에 합격한 것도

있고 해서 상급클래스에 들어가게 되었다. 하지만 처음 상급클래스에 들어갔을 때는 선생님이 말하는 것이 하나도 이해가 안되어서 6 개월 동안은 수업 따라가는 데 고생했다고 한다. 선생님은 한국에 돌아가는 편이 낫겠다고 하셨지만 이렇게 고생해왔는데 돌아갈 수 없다고 이를 악물고 열심히 했었다. 일본어학교에서 1 년 다닌 후에 아동심리학을 전문적으로 공부할 수 있는 국립대학의 연구생이 되었다. 그 대학은 집에서 가까워서 자전거로도 다닐 수 있었다고 한다.

대학원에서 아동심리학을 전공하기 위해서는 아동심리학의 기초를 배울 필요가 있었다. J 씨의 학부 전공은 경영학이었기 때문에 2 년 동안은 연구생으로서 기초를 닦고 대학원을 준비할 셈이었다. 하지만 겨우 대학원에 진학할 수 있게 되었을 때에 다른 선택의 길이 열렸다고 한다. 한국 대기업의 일본지사에 일이 들어와서 결과적으로 대학원 시험을 치르지 않고 취직을 하게 되었다. 취직 후, 얼마 안되어서 한국의 경제가 안 좋아졌는데 그로 인해 일하고 있던 회사도 일본에서 철수하게 되었다. 하지만 이번에는 그 회사에서 소개받은 일본회사로 직장을 옮기게 되었다. 그 때 나이가 31 살이었다.

◇ 풀타임 회사원으로 일본기업에서 일하다 ◇

일본기업의 새로운 일에 대하여 J 씨는 "저에게 있어서는 정말로 좋은 경험이 되었어요. 단지 돈을 벌기 위해서가 아니라 정말로 일본어도 그렇고 일본문화를 접할 수 있는 그리고 폭넓은 경험을 할 수 있는, 그런 돈을 벌면서 공부도 되었던 귀중한 경험이었어요" 라고 말했다.

입사했을 당시에는 회사의 97%가 일본사람인 직장이었다. 일본인 상사였던 부장은 자기보다 3 살 어렸으며 직장에서 J 씨는 비교적 젊은 쪽이었다고 한다. 영업직이 많은 부서에 사무여직원으로 배치되었는데 직장의 모든 사람들에게 이지메를 당한 적도 있었다고 한다. 많은 날들을 울면서 회사에 나갔는데 나중에 들어보니 주변의 사람들도 그 때는 그만두지 않을까 라고 생각할 정도로 힘든 시절이었다. 하지만 거기서 그만둔다면 "내가 지는 거야" 라며 J 씨는 결국 끝까지 열심히 했다.

그 회사는 일본 전국에서 전화로 고객서비스를 제공하고 있었기 때문에 일본어의 표준어뿐만 아니라 오사카 사투리나 토호쿠 사투리등 여러 가지 사투리를 쓰는 사람들도 상대하지 않으면 안 되었다. 어떤 때는 "죄송합니다. 다시 한번 부탁 드립니다." 라고 말하자 "그냥 돌아가버려!" 라고 화낸 고객도 있었다고 한다. 그리고 한국어를 쓰는 손님이 전화를 하면 언제나 차갑게만 대하던 직장동료가 "J 씨 부탁해요." 라면서 부탁한다고 한다. J 씨는 회사에서 20~30%는 한국어를 쓰고 있었다.

◇ 결혼, 출산, 그리고 육아 ◇

J 씨는 일본에서 다니던 교회에서 알게 된 신랑과 34 살에 결혼하였다. 결혼식은 신랑이 한국인이었기 때문에 서울에서 치렀다고 한다. 신랑의 고향에서는 결혼식을 3 일에 걸쳐서 하는 독특한 문화였는데 둘의 경우는 하루하고 조금 더 피로연을 하고 왔다고 한다.

35 살 때 첫째 아이를 출산하였다. 결혼을 할 당시에는 풀타임으로 일하고 있었지만 출산하기 1 개월 전에 퇴직을 하였다. 출산 후, 1 년 동안은 몸이 안 좋아서 애를 키우면서 휴양했다고 한다. 태어난 아기의 이름은 둘이서 생각해서 짓고 세례는 지금 다니는 교회에서 받았다고 한다.

가족이 생기게 되고 나중에 둘째를 낳았을 때는 “가끔은 한국에 가고 싶다는 생각을 하곤 해요. 만약에 결혼 전에 한국에 돌아갔다면 한국에서 살고 있겠지만 이젠 일본에서 아이를 낳았기 때문에 이곳이 내가 살아갈 장소라고나 할까.. 뭐 가끔은 한국에 가는 것도 괜찮지만 한국에 돌아가서 사는 것은 아주 먼 얘기라고 왠지 느껴져요.” 라고 말했다.

J 씨에게 있어서 자기 나라를 떠나서 새로운 삶에 도전하는 데에 많은 고난이 뒤따랐지만 그 고난을 이겨내고 안정된 생활을 이룩해낸 곳은 바로 유학을 왔던 일본이었다. 반대로 가끔 한국에 돌아가면 가족들과 만나게 되어서 기쁘지만 한국 사회가 너무 급변해서 놀랄 때도 많다고 한다. 예를 들면 휴대폰이나 인터넷이 보급되기 시작한 것은 J 씨가 일본에 온 뒤였기 때문에 J 씨는 일본의 휴대폰이나 인터넷에 익숙해져 있어서 인지 한국에서는 그 변화에 따라갈 수가 없었다.

J 씨는 출산 후에 풀타임 직원에서 파트타임으로 일을 바꾸어서 첫째 아이가 1 살이 되었을 때부터 일을 시작하였다. 둘째 아이를 출산한 뒤로 지금까지 파트타임 아르바이트와 파견사원으로서 한국어강사 일을 하고 있다. 아이들이 아직 어리기 때문에 자기 자신만의 시간이 있을 때 자기가 하고 싶은 일들을 하고 싶다고 한다.

◇ 아이들과 장래 ◇

한국어를 가르치는 일이 자기의 적성에 맞는다고 생각하기 때문에 한국어교사 국가자격증이 나오는 사이버대학에 3 학년으로 편입하여 아이들이 잠든 후에 열심히 공부하고 있다고 한다. 내년에는 첫째 아이가 초등학교에 입학하기 때문에 지금은 아이들의 교육에 대해서도 진지하게 생각 중이라고 한다. 아이들은 근처의 보육원에 다니면서 토요일은 교회에서 하는 한국어 민족학교 같은 곳에 보내고 있다. 일본어를 더 잘하지만 집에서는 엄마인 자신부터 의식적으로 한국어를 사용하고 있다고 한다. 아이들을 교육중심인 한국인학교에 보낼 것인가 아니면 천천히 자신의 페이스에 맞게 공부하고 자유로운 일본의 학교에 보낼 것인가 고민하고 있다. 단지 한국인이니까 일본에 살고 있어도 한국의 역사를 알았으면 좋겠다고 한다. 아이들에게는 한국인으로서의 자긍심을 가지고 일본에서 살아주었으면 하는 바램을 부모로서 가지고 있다고 한다.

＜インタビュー　4＞

O さん（20 代・男性）「自分の力で何とかできるのがいい」

2010 年 7 月 21 日、チャンウォン出身、日本学校生、日本在住 1 年半
インタビュアー：藤田ラウンド幸世

◇　略歴と家族　◇

O さんは 1984 年生まれ、4 人家族で両親、姉がいる。出身はチャンウォンで、小学校 3 年生のときにソウルに移る。高校卒業後、軍隊生活を 2 年送る。軍隊後、音響関係の専門学校に入学し、修了後は専門学校の先生のアシスタントを務め、その後、レコーディング・エンジニアとして 2 年間働く。

その後で、日本に 25 歳で来日。日本はレコーティング技術を磨くという目標を持って来日したが、まずは日本語学校に入学する。現在は、日本語学校に在学中で、2011 年から専門学校に入る。

◇　中学校のときに出会った日本のポップカルチャー　◇

O さんは、小学校 3 年生のときに家族がソウルに引っ越したので転校をした。それまでは山とか貯水池のある比較的郊外の街だったので友達と外でよく遊んだが、ソウルの引っ越し先の印象は町全体がマンションという印象で、友達とはサッカーぐらいしかできなかった。おもしろい性格なので学校にはすぐに溶け込めた。

O さんは中学校時代に今の O さんにとって重要となる人や本に出会っている。何でも話しあうことができる親友。中学生の頃は、勉強はあまりしなかったもの、幼児期にお母さんから本を読むように言われ続けてきたので、中学の時に偉人伝や小説を多く読んだ。その中でも 12 巻からなる冒険物語の『ドラゴンラジャ』という韓国では結構有名な本は毎日毎日読んでいた。

中学 2 年のときに、エヴァンゲリオンというアニメに初めて接して「ほんとにあの、ああすごいなと思ったんですよ」。プレーステーションやコンピューターゲームを通して、日本は面白そうな国だなとその時から興味を持った。そうして日本のアニメとゲーム、そして音楽が好きになった。

◇　軍隊での生活　◇

軍隊には、高校卒業後、6 か月で入隊、2 年間を軍隊で過ごす。軍隊は本当に厳しく、他の人が経験できないことを O さんは経験して、自分自身が変わったという。軍隊に行ったら「できないことはない」ということで、何をしても、やる気があればできると思えるようになった。

軍隊での仕事としては、家を建てたり、音響に関わる仕事をした。音響の仕事は、機材がすべて英語で、説明書などもすべて英語だったため、高校ではあまり勉強をしなかったが、軍隊で英語を独学することになった。しかし、英語は読めるようにはなったが、話すことはできない。

軍隊にいたときは中国の『三国志』を繰り返し読み、ギリシャ神話などの歴史に興味が湧いた。それから宇宙に関する本も片っ端から読んだ。軍隊では、国で本を買ってくれるので、小説や偉い人の回顧録とか、いろいろなジャンルの本も読んだ。

軍隊に入ったときに、一番考えたのが、軍隊を出た後に何ができるかとういうこと。O さんが好きなものは音楽だったので、音楽に関わる専門的な仕事をしようと

決心をした。

◇　韓国での専門学校で技術を身につける　◇

軍隊後に、音響技術を学ぶために専門学校に入学をし、一年半ほど勉強をする。修了後、専門学校の先生から、もう学生として勉強するのはいいから、自分のアシスタントにならないかと誘われた。半年間、アシスタントをした後に、就職をして二年間、レコーティング・エンジニアリングとして働く。

仕事の現場はアマチュアのバンドの人たちが CD を作るための音響調整や、ミキシングをするスタジオで、時々コンサートの仕事もあった。コンサートでミキサーといっても、実際に機械を操作するのは 5 年以上経験をした人なので、O さんは主にスピーカーを運んだり、下働きをした。

この仕事をしているときに、O さんの現場に日本の人が出張に来て、一緒に仕事をする機会があった。日本人の人は韓国語ができず、自分も日本語ができなかったが、「なんとかできたんですよ」。つまり、音楽の機材やスイッチの名前はすべて英語なので、技術さえあれば、仕事の上では日本語や韓国語の言語はあまり関係がないと実感したという。

◇　専門技術をさらに発展させるための日本留学　◇

O さんによると、韓国での音楽事情は MP３が主流で市場が小さく、日本の方が音楽市場は広いと感じたという。それなので、日本で勉強して、日本の音楽市場で働くのもいい経験になると考えるようになった。

「韓国で働いた時は、最初は留学しようとしても、留学の資金がなかったんですよ、でも留学する 3 カ月、4 か月前、いきなり行きたくて、日本語の学校、教えてもらう塾で二か月ぐらい勉強しました。まだレベルゼロから」。両親の勧めもあり、留学を決意し、韓国にある留学斡旋会社で新宿と池袋にある日本語学校を見つけ、最終的に新宿区にあった学校に決める。

新宿区の日本語学校では月曜日から金曜日まで、午前中の 9 時から 12 時半まで授業がある。来日後、半年は日本語を学ぶのに忙しかったが、半年後にアルバイトを始める。このアルバイトは日本に住んでいる韓国出身が作成したインターネット上のェブサイトで見つけた。

社会経験があり、専門技術をすでに身につけている O さんは、目標のはっきりした留学生活を送っている。しかし、日本語学校とアルバイトに限定されている生活なので、「自分が説明したい、うまく説明したい表現が日本語ではまだできないのが困る」という。特にトラブルと感じることは起きないが、バイトの面接で落ちたことなどはある。現在は、朝学校に行って、その後、アルバイトに行き、家に帰宅するのが夜の 12 時、1 時の生活。恋人は学校の同級生なので毎日、学校で会う。お金を使うことになるので、あまり出かけず、同じ繰り返しの、単調な生活に今、飽きてしまった面もある。

来日した時は、一年間、日本語を勉強して、すぐに専門学校に入ろうと考えていたが、お金が足りなかったので、二年目も日本語学校に残り、アルバイトをして専門学校に入るためのお金を貯めている。「これ以上、親のすねをかじることがちょっとできない」と感じ、日本語学校の学費、家賃を払いながら、専門学校の学費を貯めている。

日本に留学してよかったと思うことは、韓国の社会ではできない経験ができたこと。例えば、韓国社会のように年齢に縛られていなかったり、日本語学校には中国やマレーシアの友達がいるので世界に対する自分の見識が広くなったりした。それから、韓国にいれば親の世話になっていることが、日本に来て、家賃や生活費、学費を自分で働いて払うので、「自分の力で何とかできるということ」、自立したと感じることができる。

◇　将来の目標　◇

O さんは、現在、来日 1 年半なので、これから半年先に専門学校に入学し、その後の 2 年間、日本で音響技術を学ぶことになる。今の考えでは、その先は、アメリカやヨーロッパにいって音響の勉強を続け、専門性を追求していきたいという。音響の仕事ができれば、それが日本でも韓国でも他の国でも構わず、日本でこれから得る経験と他の国での経験が増えれば、さらに自分が成長し、どこでもやっていけるのではないかと考えている。こうして勉強し続けることや年齢に、特に焦りはない。

O さんの夢は、一番有名な歌手のコンサートの仕事をすることだという。レコーディング・エンジニアの仕事は、スピーカーを設置して、スピーカーで変な音がしないように、「一番いい音をお客さんに聞かせるという仕事」なので、O さんが技術者として音を支えることになり、ここにエンジニアの創造性がある。中でも、一番やりたいのは、クラシック音楽のレコーディング。そうすると日本より、ヨーロッパなどのほうに機会が多いだろうから、その時は、ヨーロッパに行くことも考える。

親のことは心配だが、自分が立派な人間になることが親孝行であると考え、今は自分の将来を優先的に考えることにしている。「今、私に興味があるのは、どうしたら自分を強くするかということ」だが、「私が今、韓国人とかいろんな留学生みて惜しいと思うのは、目標がない人は本当に迷うことです。そして、何もできなくて帰るから、お金だけ使って帰るから、それが本当に惜しいなと思います。でも目標のある人は、どこに行っても何をしてもうまくできるから、自分の目標を強く感じるのが一番大切だと思います」。

＜インタビュー　5＞

Kさん（20代・女性）「もっと勉強をするなら日本で」

2010年7月23日、テグ出身、日本語学校生、日本在住10か月
インタビュアー：藤田ラウンド幸世

◇　略歴と家族　◇

Kさんは1984年生まれ、テグ出身。両親、姉、自分、弟の5人家族。Kさんは、中学・高校と出身地のテグで過ごし、希望の大学に合格したことにより、ソウルで一人暮らしが始まる。大学では美術を専攻。

卒業を一年延ばし、英語を勉強し、TOEIC などの試験を受けたが、しかし、就職ができなかったのでそれで大学院にいく気持ちになっていった。日本へは旅行や日本の大学との展覧会交流で訪れ、その時の日本の美術館などが強く印象に残り、大学院は日本で勉強をしたいと考えるようになった。

現在は、日本語学校で日本語に磨きをかけながら、経営学を大学院で学ぶために独学で受験勉強をしている。

◇　第二外国語としての日本語　◇

K さんは、中学校のときに、両親の勧めで家庭教師から日本語を習った経験がある。期間は、3，4か月だったが、ひらがなとカナカナ、動詞の勉強をしたことを覚えている。高校で第二外国語を選択するときに、日本語、フランス語、ドイツ語の中から日本語を選んで、週に1時間の授業を受けた。日本語を選んだ理由は、中学生のときに習ったので点数がよく取れると考えたからだった。Kさんは中学や高校のときには特に日本のドラマや歌、アニメや漫画などには興味はなかったという。

大学の時も日本語の授業を 1 回くらい受けたことがあり、その時は初級クラスだった。

◇　家族から離れ、ソウルにある大学に進学　◇

K さんは地方都市のテグ市で家族と一緒に住み、地元の中学校と高校に通った。高校時代の大半は大学受験のために勉強に明け暮れた。通っていた高校は普通高校だったため、美術大学に進学を目指していたKさんは、高校1年生の時から美術アカデミーという予備校に通っていた。学校が終わると、学校の近くにあったアカデミーに通い、友達と晩御飯を食べて、ずっと 11 時まで美術の技術や勉強をした。ソウルの美術大学へは一度で合格し、とても嬉しかった。そこから、家族から離れて、ソウルのアパート生活が始まる。Kさんの通っていた大学は学力的に上の大学だということだったが、K さんいわく、「でも、入ったらあんまり他のところと変わってないという」印象だった。

◇　日本との出会い　◇

大学時代に日本に旅行に行き、「美術館にいったら、韓国より、なんか、美術とか、芸術とかがちょっと発展していると感じて、勉強をするなら日本でしたいなと思いました。」

Kさんは今回の留学の前に、3回日本に来ている。初めに来たのは、22歳のときだった。1回目は、大学の学科の友達と相談して、3泊4日で日本の大阪に行った。

2 回目は、初め、卒業旅行として友達とヨーロッパへ行くつもりだったが、予約をするのが遅かったため、ヨーロッパツアーの定員がいっぱいになってしまい、その代わりとして 2 週間の東京と大阪の旅行をしている。その時は「新幹線に乗りたかった」という旅行の楽しみもあった。3 回目は、大学卒業後、東京の浅草で、日本と韓国の美術大生が一緒に交流展示会をするために、5 日間展示会をしながら滞在した。

こうした短期の旅行は、動機はどうしても日本に来たかったというわけではなく、大学を通して、また偶然が重なったという要素が強かった。この頃に見た日本のドラマは、『のだめカンタービレ』で「かわいくて、ドラマなんだけど、ファンタジーな感じ、漫画みたいな感じがあって、韓国のドラマと違うところがいいです」といっている。

大学を一年間休学し、23 歳で卒業した。休学期間中は、英語を勉強して就職をしようとしたが、なかなかむずかしく、その中で日本の大学院に進学する意志を固めていった。

◇　日本への留学　◇

K さんは、日本への留学を決心してから、6 ヶ月後に来日している。その間、3, 4 か月の間、集中して日本語を勉強し、日本語能力試験 2 級に合格している。しかし、試験は「運よく」合格したということだが、実際に日本に来たときには会話ができないことを痛感したという。日本語学校が始まったときのプレースメントテストでは、日本語能力試験 2 級の勉強の成果が反映され、日本語学校では初めからレベル 4 にプレースされた。

K さんは、美術を専門として大学院で勉強をしようとしたら、大学院の入試にも美術の実技が問われるので、留学院で日本語学校を選ぶ時に、日本語ばかり勉強させられる厳しい学校はやめようと考えたという。美術の専門科目は自分で勉強しようと考えていたので、日本語習得に使う時間と労力とのバランスを考えていたようだった。

そうして選んだ新宿区にある日本語学校だったが、入ってみるとやはり、日本語の勉強は予想以上に厳しくて、勉強は大変だと感じる。しかも、K さんは、大学院の専攻を美術から経営に変えたので、週 5 日の午前中を日本語学校の授業で勉強をし、あとは週に一度くらいは気分転換をするが、それ以外、ほとんど家で勉強をする毎日を送っている。大学院の入試には、英語も必要で、これまでの専門と違うので経営の勉強も一人でしなければならない。2011 年 1 月の受験までは勉強漬けである。

K さんは、両親から全面的なサポートを受けて勉強をしているので、今のところはアルバイトはせずに勉強に打ち込める環境にある。

K さんは、2009 年 3 月に日本に留学する決意をし、2009 年 10 月に来日をしたのだが、留学生活を始めるに当たって、当初、日本へ留学する人が集まってするブログ、「トンリュ」で、インターネット上で探したアパートに韓国のルームメートと一緒に住んだという。しかし、インターネットで探した最初のルームメートとは、あまり合わず、現在は、引っ越しして、気の合う友人と同じマンションに隣同士、住んでいる。

故郷のテグの両親とは、インターネット上の「スカイプ」というテレビのように顔をみながら話ができるネット電話で定期的に話、就職・大学のためソウルにいる

姉と弟たちとは、インターネット上のチャットで連絡を取り合っている。今年の K さんの誕生日には、韓国から母親と姉が日本に会いにきてくれたという。

◇　将来の夢　◇

K さんの、近い将来の夢は、大学院で経営関係の勉強をして、2 年後に修了するときに、日本で就職し、後々は「ブランド・マネージャー」になることである。「ブランド・マネージャーになりたいんですが、ブランド・マネージャーって初めからできないから、マーケティング部署とかに入ると思います。例えば、TOYOTA のレクサスというブランドがあったら、全体的にブランドをネーミングとか、イメージとか、マーケティング方法とかを管理する人になりたいです」。

美術専攻の学部のときに、そうした勉強を少ししたということだが、美術だけでは就職の競争で残ることができないことから、日本では大学院で経営学を勉強しようと専攻を変えたらしい。

日本で就職できたら、できるだけ働いて、キャリアを積み、マネージャーになるくらいに努めたいという。その上でキャリアが確立したあとに、もし「スカウトとかされたら」韓国に戻ることも考えるかもしれない。

キャリアとは別に、歳をとったら、または、家族ができたら、カナダやオーストラリアなど、「住みやすいっていうか、環境のいいところ、アジアって学歴とか必要だし、なんか、競争が激しいっている感じがあって、住みやすいところ」に子どものためにそうした環境の中で住んでみたいと思うこともある。自分の子どもには競争が激しくないところで育ってほしいという願いがあるようだった。

<인터뷰 5>

K 씨 (20 대 여성) "더욱 더 공부를 한다면 일본에서"

2010 년 7 월 23 일, 대구출신, 일본어학교생, 일본체재 10 개월
인터뷰: 후지타 라운드 사치요

◇ 약력과 가족 ◇

K 씨는 1984 년, 대구에서 태어나 부모님과 언니, K 씨, 남동생으로 5 인 가족이다. K 씨는 중학교와 고등학교 시절을 대구에서 보내고 희망했던 대학교에 입학하여서 서울에서 자취생활을 시작했다. 대학교에서는 미술을 전공하였다.

졸업을 1 년간 미뤄서 영어를 공부하여 TOEIC 시험 등을 치렀으나 취직을 못했기 때문에 그 길로 대학원에 진학하려고 했었다. 일본에는 여행이나 일본대학의 전람회에 교류를 위해 오게 되었는데 그 때 일본 미술관 같은 곳이 너무나 인상에 남아서 대학원은 일본에서 진학하기로 마음을 먹었다.

지금은 일본어학교에서 일본어를 갈고 닦으며 경영학을 대학원에서 배우기 위해 독학으로 공부를 하고 있다.

◇ 제 2 외국어로서의 일본어 ◇

K 씨는 중학교 시절에 부모님이 시켜서 가정교사에게 일본어를 배운 적이 있다. 3, 4 개월 밖에 배우진 않았지만 히라가나와 카타카나, 동사의 활용에 대해 배운 기억이 있다고 한다. 고등학교에서 제 2 외국어를 선택할 때에는 일본어와 프랑스어, 독일어 중에 일본어를 선택하여 일주일에 한 시간 일본어 수업을 받았다고 한다. 일본어를 선택한 이유는 중학교 때 한 번 배웠었기 때문에 점수를 잘 받지 않을까 라고 생각해서였다. K 씨는 중학교와 고등학교 때에는 특히 일본의 드라마나 노래, 애니메이션, 영화 등에 관심이 많았다고 한다.

대학교에 들어가서도 일본어 수업을 한 번 정도 들었는데 그 때에는 초급클래스였다고 한다.

◇ 가족으로부터 떨어져 서울의 대학에 진학 ◇

K 씨는 지방도시인 대구에서 가족들과 같이 살면서 그 곳에서 중학교와 고등학교를 다녔었다. 고등학교 시절의 대부분은 대학 수험을 위해 공부만 했었다. 다니고 있었던 고등학교는 보통의 학교였었기 때문에 미술대학을 꿈꾸고 있었던 K 씨는 고등학교 1 학년 때부터 미술아카데미라는 입시준비학교에 다녔었다. 학교가 끝나면 학교 근처에 있었던 아카데미에 가서 친구들과 저녁밥을 먹고 11 시까지 계속 미술에 관한 기술을 배웠었다고 한다. 서울의 미술대학에는 한 번에 합격하여 정말 기뻤다고 한다. 그 때부터 가족들과 떨어져 서울에서 자취생활이 시작되었다. K 씨가 다니고 있었던 대학교는 성적이 우수한 학교였지만 K 씨는 "하지만 들어가보니 다른 학교들과 별 다를 것이 없었어요." 라는 인상을 받았다고 한다.

◇ 일본과의 만남 ◇

K 씨는 일본에 유학 오기로 결심하고 6 개월 뒤에 일본에 오게 된다. 그 사이에 3, 4 개월 동안 집중적으로 일본어를 공부하여 일본어능력시험 2 급에 합격하였다. 하지만 시험에는 운이 좋아서 합격했다고 하는 실제로 일본에 왔을

때는 회화가 전혀 안 되는 것을 실감했다고 한다. 일본어학교가 시작되었을 때 봤던 레벨 테스트에서는 일본어능력시험 2 급의 성과를 인정받아서 일본어학교에서는 처음부터 레벨 4 에 배정받았다.

K 씨는 미술을 전문으로 하는 대학원에서 공부하려고 한다면 대학원 입시에서 미술 실기도 보기 때문에 유학원에서 일본어만 공부시키는 엄격한 학교는 가지 않으려고 했다고 한다. 미술의 전문과목은 자기 스스로 공부하려고 생각했었기 때문에 일본어 습득에 쓰는 시간과 노력을 밸런스에 맞게 생각하고 있었던 것 같다.

그렇게 해서 선택한 학교가 신쥬쿠에 있었는데 역시 들어가 보니까 일본어 공부가 예상했던 것 이상으로 엄격해서 공부가 너무 힘들었다고 한다. 하지만 K 씨는 대학원의 전공을 미술에서 경영학으로 바꾸었기 때문에 주 5 일의 오전은 일본어학교 수업에서 공부를 하고 나머지 하루 정도는 기분전환을 하지만 그 외에는 거의 집에서 공부를 한다고 한다. 대학원의 입시는 영어가 필수인데 지금까지의 전공과는 다르게 경영 공부도 혼자서 하지 않으면 안되었다. 2011 년 1 월의 수험까지 열심히 공부하는 수 밖에 없다.

K 씨는 부모님으로부터 전면적인 지원을 받으며 공부를 하고 있기 때문에 아직은 아르바이트를 하지 않고 공부에만 전념할 수 있는 환경에 있다.

K 씨는 2009 년 3 월에 일본에 유학오기로 결심하여 2009 년 10 월에 일본에 왔지만 유학생활을 시작하기에 앞서서 처음에는 일본에 유학 하려고 하는 사람들이 모이는 인터넷 블로그 “동유” 에서 찾은 아파트에서 한국의 룸메이트와 같이 살고 있다고 한다. 하지만 인터넷에 구한 처음의 룸메이트와는 별로 맞지 않아서 지금은 이사하여 맘이 맞는 친구와 맨션에서 이웃으로 지내고 있다고 한다.

고향의 대구에 계시는 부모님은 인터넷상에서 텔레비전처럼 얼굴을 보면서 전화를 할 수 있는 “스카이프” 라는 인터넷전화로 정기적으로 이야기를 하고 서울에서 대학을 다니고 있는 언니와 남동생과는 인터넷에서 채팅으로 연락을 주고 받고 있다. 올해 K 씨의 생일에는 한국에서 어머니와 언니가 일본에 만나러 와주었다고 한다.

◇ 장래의 꿈 ◇

K 씨의 가까운 장래의 꿈은 대학원에서 경영에 관련된 공부를 하여 2 년 후에 졸업할 때는 일본에 취직하여 나중에 “브랜드 매니저” 가 되는 것이 최종적인 꿈이다. “브랜드 매니저가 되고 싶은데 처음부터 브랜드 매니저가 될 수는 없으니까 마케팅 부서 같은 곳에 들어갈 것 같아요. 예를 들면 도요타의 렉서스라는 브랜드가 있으면 전체적으로 브랜드의 네이밍이나 이미지나 마케팅 방법 등을 관리하는 사람이 되고 싶어요.”

미술 전공의 학부이었을 때는 그러한 공부를 조금씩 했었다고 하는데 미술만으로는 취직 경쟁에서 이길 수가 없기 때문에 일본에서는 경영학을 공부하고자 대학원의 전공을 바꾸었다고 한다.

일본에서 취직할 수만 있다면 가능한 만큼 일해서 경력을 쌓고 매니저가 될 정도로 일하고 싶다고 한다. 그리고 경력이 어느 정도 확립되었을 때 만약 한국에서 스카우트 제의가 온다면 돌아갈 의향도 있다고 한다.

경력과는 또 다르게 나이가 들면, 또는 가족이 생긴다면 캐나다나 호주 등

“살기 좋다고 해야 하나.. 좋은 환경이 있는 곳.. 아시아는 학력도 필요하고 뭔가 경쟁이 심하다는 느낌이 있어서 살기 편한 곳” 으로 가서 아이들을 위해 그런 환경에서 살고 싶다고 생각을 해 본적도 있다고 한다. 자신의 아이들의 경쟁이 심하지 않은 환경에서 키웠으면 좋겠다는 소원이 있는 듯했다.

＜インタビュー　6＞

Z さん（20 代・女性）「日本で学び、写真作家になりたい」

2010 年 7 月 23 日、ソウル出身、日本語学校生、日本在住 1 年 7 カ月
インタビュアー：藤田ラウンド幸世

◇　略歴と家族　◇

Z さんは 1989 年生まれ。両親、自分、弟の 4 人家族。Z さんは、中学生のころからに日本の音楽やドラマに関心を持った。それがきっかけとなり、中学 1 年生の時に、放課後の日本語教室に友達と一緒に申し込んで日本語を習う。

高校生の時に参加した美術キャンプで、美術よりも写真が自分にあっていると開眼する。その後、好きな写真家ができ、その写真家が日本人であった。

Z さんは大学受験をし、美術大学にも合格したが、大学に入らずに、日本の大学で写真を勉強するため、来日することにした。現在は、日本語学校で日本語を学びながら、2011 年の大学入学試験に向けて、毎日勉強をしている。

◇　身近な外国文化としての日本　◇

Z さんは、中学校の時に日本の音楽やドラマに関心をもった。初めに好きになったドラマは嵐のメンバー、松本潤主演の『君はペット』だった。その頃は、韓国では、日本文化開放が始まったころなので、日本の音楽や CD が一気に韓国に入ってきた。

Z さんは、友達と一緒に、中学校で行われる日本語教室に申し込み、週に 2, 3 回、日本語を習ったことがある。ひらがなやカタカナを少人数で習ったが、「でもその時は、本当に難しくて、それで、見ても読めない感じだったんですね。」それなので、この教室で日本語を習ったのは半年くらいだった。

その頃、Z さんはピアノも習っていた。勉強をすることに興味が持てなかったことから、将来は音楽が好きなので芸術家の道に進もうと母親と相談して決めた。中学 3 年生の頃、練習も大変で、経済的な問題もあるので、「好きなだけではできないから」ピアノもやめた。

高校は普通高校に入学をした。高校二年生の時に、第二外国語としての日本語を勉強する。このときは、週に 2,3 回、1 年間勉強をした。

◇　写真を日本で勉強したい　◇

ピアノをやめた時にも、音楽や美術など、好きなことは続け、それが高校 1 年の時に、高校の美術部への入部につながった。その部活担当の先生がとてもいい先生だった。最初、母親が「美術？」と怪訝な感じで言っていたが、先生と話しをしたりするようになり、部活に対して理解して、応援してくれるようになった。

高校 2 年生の時に、美術キャンプに参加した。そこでキャンプの先生から「美術より写真が向いているんじゃない？」と言われたことをきっかけに、写真という芸術形式に興味を持ち始めた。ただ、その時はすでに高校 2 年生だったので、大学の美術専攻のための勉強もし始めてしまっていたこともあるので、すぐに専攻は変えられなかった。しかし、「ずっとそれ（写真）を心に置いて、美術を続けました」。

大学受験に関しては、親と意見が合わずに、苦しい時期もあった。Z さんは日本で勉強したいという希望を親に話したが、親からは反対されて、韓国で勉強してほ

しいといわれた。そして、「まず受験して受けてみてよ」と言われた。結局、韓国の美術大学を３校受けて、そのうち１校に合格を果たした。Z さんは、それでも学科に対しても、学校に対しても自分の思いとはぴったり合うと思えず、心の中では、日本で写真の勉強をしたいということの方が強くなっていった。「確信というか、心がたたないというか、この大学や学科で勉強したいとはどうしても思えなかったんです」。「美術学科で絵を描くことを勉強するよりも、写真について、映像について勉強してみたいという感じの方がもっと強かったんです。」

Z さんによると、韓国にもその当時、二つ、写真学科はあったというが、受験勉強で受ける科目や成績の基準がこれまで準備してきた科目と違うため、間に合わなかったという。それもあり、親の期待に応えるため、また高校３年生の自分が日本に行きたいと言うと反対されるので、まずは、美術学科の受験をしたわけである。しかし同時に、Z さんは、「たぶん、合格したら、親と話しあうときにもっと話が通じると思った」という。つまり、大学受験は日本に行くための一つの過程だと考えていたようであった。

なぜ日本で写真を勉強しようと考えるに至ったかというと、Z さんには好きな写真家がいて、その人は川内倫子という日本人の写真作家だった。この写真作家の世界に魅かれ、日本で勉強できたら、韓国よりももっと幅の広い仕事ができるのではないかと考えたという。

◇　日本への留学準備　◇

Z さんは、2008 年に高校を卒業し、日本には 2009 年 1 月に来日している。この間の一年間は、日本語の学校に通って勉強をしながら、留学資金を貯めるためのアルバイトをしていた。このときも、こうした一生懸命に準備をする Z さんをの姿を見たら、親が認めてくれるのではないかという期待が常にあったようだった。

この時期、実のところは、母親と口裏を合わせて、父親には大学に行っていると言っていたという。父親には、日本に出発する 1 週間前に日本に行くことを話したという。

こうして、ようやく日本に辿り着いた Z さんは、新宿区の日本語学校に入学した。そこの学校のプレースメントテストを受けて入ったクラスは、レベル 1 だったので、これまで日本語を勉強してきたのに、なぜと思ったという。しかし、それが現実だと受け入れて勉強を始めた。

◇　日本の生活　◇

Z さんは、初めの 3 カ月はお母さんの知り合いの「お姉さん」と一緒に暮らしたが、今は、現在通っている気の合う同じ日本語学校の友達と、同じマンションに住んでいる。

初めのころは、生活上の人間関係に疲れ、韓国に帰りたくなったり、気持ちの上でも日本にきてよかったのかどうか、迷ったりすることもあった。今では、それが自分の成長する過程だと前向きに考えることができる。

Z さんが、日本に来てよかったと思うことは、いろいろな国の人と会えることである。自分は日本社会の中では「外国人」だが、日本語学校の中ではいろいろな背景や国籍の友達がいるので、そうした韓国社会ではない空間で、多国籍の友人たちと一緒に勉強ができるのが嬉しい。

逆に嫌なことは、日本が韓国を下に見ているという感じがするときとか、自分の名前の漢字を間違えられる時。韓国でも、日本のことを下に見ることがあることがあるかもしれないとわかりつつも、どうしてそのようにしか見ることができないのかと時に漠然と思う。また、自分にとっては、いつもは、親切ですみません、すみませんと丁寧に接する日本の人が、友達づきあいをするときに、自分と距離を置くのも不思議な感じがする。何より、外国人登録証のために日本の市役所に行くと自分は「外国人」なんだと実感する。

Z さんは、大久保のように日本の中で韓国人が多く集まるようなところには行かないようにしているという。「せっかく日本に来たのに、なぜ日本にきてまで？」と考えるからだ。キムチも、日本のスーパーで買うもので十分だという。今は、アルバイトをしていないので、人間関係に悩むことはないが、日本の大学生活やアルバイトが始まると新たな人間関係が生まれると将来のことを考えると、どうなるかちょっと心配している。

◇　将来の夢　◇

Z さんの、近い将来の夢は、高校の頃からの夢であり、様々な困難をくぐりぬけて辿り着いた、日本の大学で写真を学ぶことである。日本に来てからの 1 年 7 カ月に勉強してきたことが、これから受験する志望校の入学という形で実ることがまずは夢の第一歩である。

大学に受かったら、4 年間は勉強し、その後、日本で就職を考えている。今のところは、韓国で就職することは考えておらず、もし韓国に自分ができることがあるようであれば、行ってもいいと思う。日本には、大学の 4 年間、さらに大学院に行くかもしれず、日本にはこれから 10 年くらいは住むことになると思っている。

将来の目標は、写真作家に変わりはない。

<인터뷰 6>

Z 씨 (20 대, 여성) "일본에서 배워서 사진작가가 되고 싶어요"

2010 년 7 월 23 일, 서울 출생, 일본어학교 학생, 일본체재 1 년 7 개월
인터뷰: 후지타 라운드 사치요

◇ 약력과 가족 ◇

Z 씨는 1989 년 출생으로 부모와 남동생, 그리고 Z 씨 4 명 가족이다. Z 씨는 중학교 시절부터 일본의 음악이나 드라마에 관심을 가지고 있었다. 그것을 계기로 중학교 1 학년 때 친구와 같이 일본어 교실에 등록해서 방과후에 일본어를 배우게 되었다.

고등학교 시절 참가했었던 미술캠프에서 미술보다는 사진이 자기에게 더 맞는다고 깨달았다. 그 후로 좋아하는 사진작가가 생겼는데 그 사진작가는 일본인이었다.

Z 씨는 대학시험을 본 뒤, 미술대학교에 합격하였으나 들어가지 않고 일본의 대학교에서 사진을 공부하기 위해 일본으로 오기로 했다. 지금은 일본어학교에서 일본어를 배우면서 2011 년 대학입학시험을 위해 매일 공부하고 있다.

◇ 친숙한 외국문화로서의 일본 ◇

Z 씨는 중학교 시절에 일본의 음악이나 드라마에 관심을 가지고 있었다. 처음으로 좋아하게 된 드라마는 아라시 멤버인 마츠모토 쥰이 주연으로 나오는 "너는 펫" 이었다. 그 때에는 한국에서 일본문화개방이 시작되고 있었기 때문에 일본의 음악이나 CD 가 한꺼번에 한국에 몰려들어왔었다.

Z 씨는 중학교에서 열리는 일본어교실에 친구와 함께 신청해서 일주일에 두, 세 번 정도 일본어를 배웠던 적이 있었다. 적은 인원으로 히라가나와 카타카나를 배웠지만 "그 당시에는 정말로 어려워서 봐도 읽을 수가 없었어요." 라면서 그렇기 때문에 반년 정도만 일본어를 배웠었다고 한다.

그 때 즈음, Z 씨는 피아노도 배우고 있었다. 공부에 그다지 흥미를 가지지 않았고 음악을 좋아했기 때문에 어머니와 상담하여 장래에는 예술학의 길로 나아가기로 결정했다. 중학교 3 학년 때, 연습도 힘들었고 경제적으로도 문제가 있어서 "좋아하는 것만으로는 할 수 없구나" 라고 생각하고 피아노를 그만두었다.

고등학교는 보통의 학교에 진학하였다. 고교 2 학년 때에 제 2 외국어로 일본어를 배웠다. 그 때는 일주일에 두, 세 번씩 1 년간 배웠었다.

◇ 일본에서 사진에 대해 공부하고 싶어요 ◇

피아노를 그만뒀을 때도 음악이나 미술 등, 좋아하는 것을 계속해서 해왔고 그래서 고교 1 학년 때에는 미술부에 입부하게 되었다. 서클담당 선생님은 매우 좋은 분이셨는데 처음엔 의아한 듯이 "미술?" 이라고 말씀하셨던 어머니도 그 선생님과 이야기를 나누게 되면서 서클활동에 대해서 이해해주시고 응원해주셨다.

고교 2 학년 때, 미술캠프에 참가했었다. 그곳의 캠프 선생님이 "미술보다 사진이 더 적성에 맞지 않을까?" 라고 말씀해 주셨는데 그것을 계기로 사진이라는 예술 형식에 흥미를 가지기 시작했다. 그때는 2 학년이었기 때문에 대학의 미술전공을 위해서 공부를 시작해버렸기 때문에 바로 전공을 바꿀 수는

없었다. 하지만 “늘 그것(사진)을 마음에 두고 미술을 계속했었습니다.” 라고 말했다.

대학교에 진학할 때는 부모님과 의견이 맞지 않아 힘들 때도 많았다고 한다. Z 씨는 일본에서 공부하고 싶다는 뜻을 부모에게 말했으나 반대를 하셔서 한국에서 공부를 했으면 좋겠다 라고 말씀하셨다고 한다. 그리고 “일단은 시험을 쳐봐라” 라고 말씀하셨다고 한다. 결국 한국의 미술대학교를 세 군데 시험 쳐서 그 중 한 군데 합격했다. 그렇지만 Z 씨는 학과도 그렇고 학교도 그렇고 자신의 생각과는 다르다고 생각하면서 마음 속에는 일본에서 사진을 배우고자 하는 생각이 더욱더 커져만 갔다. “확신이랄까, 마음을 접지 못 했다고 할까, 이 대학교나 학과에서는 공부하고 싶다는 마음이 아무래도 생기지 않았어요.” “미술학과에서 그림 그리는 법을 배우는 것보다 사진에 대하여, 영상에 대하여 공부하고 싶다는 마음이 점점 강해졌었어요.”

Z 씨는 그 당시 한국에도 두 곳의 사진학과가 있었지만 수험 과목이나 성적의 기준이 지금까지 준비해온 과목과 다르기 때문에 제 시간에 맞추지 못 했다고 한다. 그리고 부모의 기대에 부응하기 위해, 또 고교 3 학년인 자기가 일본에 가겠다고 하면 반대하실 것이 분명하기 때문에 일단은 미술학과의 시험을 보았다고 한다. 하지만 그와 동시에 Z 씨는 “아마 대학교에 합격한다면 부모님에게도 더욱더 말이 통할거라고 생각했어요.” 라고 말했다. 즉, Z 씨에게는 대학교 시험도 일본에 가기 위한 하나의 과정이라고 생각했었던 모양이다.

일본에서 사진을 공부하고자 마음먹게 된 계기를 묻자 Z 씨는 좋아하는 사진가가 있는데 그 사람의 이름은 川内倫子라는 일본인 사진작가였다. 이 사진작가는 세계에서도 사랑을 받고 있는데 일본에서 공부를 한다면 한국보다도 더욱 폭 넓은 활동을 할 수 있지 않을까 라고 생각했다고 한다.

◇ 일본으로의 유학준비 ◇

Z 씨는 2008 년도에 고등학교를 졸업하고 일본에는 2009 년 1 월에 왔다. 졸업하고 일본에 오기까지의 1 년은 일본어 학교에 다니면서 공부를 했었고 유학자금을 모으기 위해 아르바이트를 했었다. 그 때에도 열심히 일하면서 유학을 준비하는 Z 씨를 부모님이 보신다면 인정해주시지 않을까라는 기대감이 항상 있었던 모양이다.

그 시기에는 어머니와 말을 맞춰서 아버지에게 대학교에 다니고 있다고 말했었다고 한다. 아버지에게는 일본에 오기 일주일 전에 일본에 간다고 말했다고 한다.

이렇게 해서 겨우 일본에 도착한 Z 씨는 신쥬쿠의 일본어 학교에 입학했다. 그 곳의 학교에 레벨테스트를 받고 들어간 클래스는 레벨 1 이었기 때문에 지금까지 일본어를 배워왔는데 왜? 라는 느낌을 받았다고 한다. 하지만 이 현실을 받아들이고 공부를 시작했다고 한다.

◇ 일본에서의 생활 ◇

일본에서 처음 3 개월은 어머니께서 아시는 분의 “언니” 되시는 분과 함께 생활했었는데 지금은 다니고 있는 일본어 학교의 죽이 잘 맞는 친구와 같은 맨션에서 살고 있다고 한다.

처음에는 생활하면서 인간관계에 지쳐서 한국에 돌아가고 싶어졌거나 심적으로도 일본에 온 게 잘한 것인지 못한 것인지 자기 자신도 모르게 될 때가 있었다고 한다. 지금은 이러한 일들도 자기가 성장하는 하나의 과정이라고,

긍정적으로 생각할 수 있게 되었다고 한다.

Z 씨가 일본에 와서 잘 했다고 생각한 것은 많은 나라 사람들과 만날 수 있는 것이라고 한다. 일본 사회에서는 자기도 “외국인” 이지만 일본어 학교에서는 여러 가지 배경이나 국적을 가진 친구들이 있어서 한국 사회에서는 경험하지 못 하는 공간에서 많은 국적의 친구들과 함께 공부할 수 있는 것이 너무 즐겁다고 한다.

반대로 싫은 점은 일본이 한국을 깔보는 듯한 느낌을 받을 때나 자기의 한자 이름을 틀릴 때이다. 한국에서도 일본을 깔보는 일들이 많을 지도 모른다고 이해는 하지만 한국을 그렇게 밖에 볼 수 없는지 막연하게 생각할 때가 많다고 한다. 그리고 자기에게 늘 친절하게 “ですみません、すみません” 이라면서 예의 바르게 대해주는 사람도 다른 친구들이 섞이면 갑자기 거리를 두는 것도 이해가 안 된다고 한다. 무엇보다 외국인등록증을 만들기 위해 일본의 시청에 갈 때 자기는 “외국인” 이라는 것을 실감하게 된다고 한다.

Z 씨는 오오쿠보와 같이 일본에서 한국인이 많이 모이는 장소에는 잘 가지 않는 다고 한다. “모처럼 일본에 왔는데 여기까지 와서 왜?” 라고 생각하기 때문이라고 한다. 김치도 일본의 슈퍼에서 충분히 살 수 있다고. 지금은 아르바이트를 안 하고 있기 때문에 인간관계로 고민할 일은 없지만 일본의 대학생활이나 아르바이트를 시작하게 된다면 새로운 인간관계가 생기게 될 것이고, 그러한 앞으로의 일들을 생각해 보면 조금은 걱정이 된다고 한다.

◇ 장래의 꿈 ◇

Z 씨의 장래의 꿈은 일본에서 사진을 공부하는 것으로 고등학교 때부터의 꿈이자 수 많은 고난을 뛰어 넘고 손에 쥔 꿈이다. 일본에 와서 1 년 7 개월 동안 공부해 온 것들이, 그리고 앞으로 시험 칠 지망학교에 합격하여 입학하게 되는 것이 일단은 꿈을 이루는 데 첫 걸음이 될 것이다.

대학입시에 합격한다면 4 년 동안은 공부하고 그 뒤에 일본에서 취직하고 싶다고 한다. 지금은 한국에서 취직할 생각은 하고 있지 않지만 만약에 한국에서 자기가 할 수 있는 일이 있으면 돌아갈 수 있다고 한다. 일본에는 대학교에서의 4 년간 그리고 대학원에 갈 지도 모르니까 앞으로 10 년 정도는 살게 될 것 같다고 한다.

장래의 목표인 사진작가에는 변함이 없다.

＜インタビュー　7＞

イサオさん（30 代・男性）「映画ばかりの三十年」

2011 年 4 月 20 日、テグ郊外出身、大学院生、日本在住 3 年
インタビュアー：渡辺幸倫

『冷温』という映画をご存じだろうか。日韓中の合同製作映画として 2011 年に公開されたばかりの映画だ。おそらく相当の映画通でも聞いたことがないかもしれない。確かに、大手の配給会社が付いていたわけでもなく、多くのスクリーンを占拠した話題作というわけでもない。荒削りな映像に特殊な設定、未熟な点も多々あるが、何かを作ろうとする情熱だけは感じられる。それもそのはず。実は、新宿にある映画大学院の学生による自主製作作品なのだ。

日韓中の合作映画とはいうが、実際に携わったほとんど日本の学生だった。だが、何人か留学生もいた。中国からの留学生が 2 人。そして韓国代表として監督を務めたのがイサオ（日本に来てから使うようになった韓国名を訓読みしたあだ名だ）さんだ。確かに日韓中の合同作品に違いはない。10 年ほど前にあった新大久保駅での事故を下敷きにしたという製作秘話が関心を引いたのか、多少の脚色（?）とともに新聞にも大きく取り上げられた。

今回のインタビューでは、イサオさんの日本生活の集大成ともいえるこの作品まで、どのようにたどり着いたのか聞いてみた。

◇　映画との出会い　◇

イサオさんは子どもの頃のある日、父に手をひかれて 40 分もバスに乗った。

「田舎でほんとに何にもなかったから。お父さんも、たまには何かやってあげたいと思ったんでしょうね」。着いた先は映画館。そして、その時に見たのがあのスティーブン・スピルバーグ監督の名作 SF『E.T.』とキムチョンギ監督の『ウレメ』（韓国版仮面ライダーのような作品）。1986 年のことだった。「もう、真っ暗なところに連れられて、何なんだろう…とかおもいましたよ。でも、そこはほんとに天国だったんですよ。おおげさじゃなくて。」イサオさんはすぐにスクリーンに映る天国のとりこになった。

高校まではどこにでもいるテグ郊外で過ごす映画や芝居が好きな少年だったが、大学進学の際には本格的に演劇学科を志望した。しかし、軍隊に行って体が固くなり、弱点であった方言が乗り越えられず映画の勉強をすることになった。両親は、芸術学科への進学、そして映画を勉強することに反対していた。「きっかけを作ったのはお父さんだったんですけどね」とイサオさんは笑う。

大学生活は楽しく充実していた。映画製作の手法を学んだり、映画製作のアルバイトをして現場を経験したりもした。日本との出会いはそんな時だった。

「それまでの日本のイメージは、マンガ、アニメ、やくざ。歴史のこともあるし、ほんとやくざとか侍のような乱暴な国というイメージでしたね」。そんな日本の印象が日本映画に詳しい友達の影響で見た映画で一変する。黒沢明や小津安二郎だった。「ほんとにイメージと違って、繊細な表現なんですよ。1950 年ころですよ。日本も戦争のあとで何にもない時だし、韓国は戦争してるときで大変だったし、そんな時にこんな映画が作られてたなんて…。ほんとびっくりしましたね。『東京物語』。『晩春』。『お茶付けの味』。日本人にこんな感性があるとは思いませんでした」。こ

の出会いがイサオさんを日本に向かわせた。

◇　来日と映画大学院への進学　◇

2007 年に来日し、日本語学校に 2 年間通った。授業、アルバイト、映画、忙しい日々だった。

皿洗いのアルバイトをした時に、とても印象に残っていることがある。

「お皿を洗ってたら、先輩が『@O&X$%$#』って言うんですね。良く分からなかったんで、『は～い』っといってニコニコしてたんです。そしたらその先輩が突然『馬鹿ヤロー！！』って。びっくりしましたよ。後でよく聞いたら『割れちゃうよ、注意して』って言ってたみたいなんです。私の皿の洗い方が危なかったんでしょうね。まあ、怒りますよね。普通」と笑って話してくれた。しかし、これをきっかけに「もう、ものすごく日本語勉強したくなりましたよね」というのだ。実際 3 か月ほどで日本語能力試験 2 級程度の実力はついたという。「どんどん聞こえるようになって、もう楽しかったですね」と振り返る。

2 年ほど日本語を勉強したころには、日本語力も申し分なくなり、念願の映画関係の大学院進学を決めた。日本語学校時代は忙しく、映画も見るだけで、実際に日本の現場で撮影などを学ぶ機会はなかった。それが大学院に進学することで、高度な技術を学ぶことができると考えていたわけだ。

◇　大学院での経験　◇

しかし、入学後にすぐに大学院での勉強に違和感を覚えてしまう。同級生が黒沢明や小津安二郎をあまりにも知らないことに驚いただけではない。「実は大学院で学んでいたことが思ったのと違ったんです」という。もともと映画撮影の現場の仕事に関心のあったイサオさんは韓国での大学生時代も現場での経験を重視していた。日本に映画の大学院があると知ったときには、さらに自分の技術を伸ばせる、自分のためにあるような大学院とまで感じたことだろう。

しかし、この大学院は、撮影の技術というよりも「ビジネスとしての映画」全体を扱うところだった。「映画産業論とか、経済とか経営とか。プロデューサーになるためなんですね。僕は監督になりたいのに」。入学してすぐに気がついたが時すでに遅し。気持ちを入れ替えて勉強に励もうとはしたが、なかなか身が入らない。そんな時に学校の仲間と映画を撮影する企画が持ち上がった。それが冒頭に挙げた『冷温』だ。「もう映画撮影してるときはほとんど勉強しませんでしたね。正直言って」。とにかく撮影に没頭した。「脚本を書いたり、役所とか警察で撮影許可取ったり、機材を調達したり、いろいろ大変でしたよ」。その成果はぜひ DVD で見てほしい。

◇　これから　◇

イサオさんはこの映画の完成を区切りに大学院を中退し、帰国することにした。やはり映画の現場で働きたいし、韓国の方がチャンスがあると感じたのだろう。大学院を途中でやめることに心残りも多少はあるが、それよりも帰国してからの可能性に魅力を感じている。「韓国で働いていた時の友達もまだいるし、いろいろ紹介してもらって、現場に戻りたいですね」。気持ちはすでに韓国の撮影現場にある。

ただ、大学院をやめること以上に気になることがある。

「私には『日本の母』がいるんです」とイサオさんはいう。日本には 3 年間住ん

でいたが、初めの 1 年半は韓国人寮、残りの 1 年半はホームステイをした。もともとは、韓国語を教えるアルバイト先の生徒さんだったそうだが、あるきっかけでお世話になることになった。帰国を決めた今、この「日本の母」のことだけは心配だ。「韓国に帰っても電話したりしますよ。あと、一年に一回くらいは 1 泊 2 日でも、2 泊 3 日でも日本に来て、顔を見たいです」という。

日本留学と映画の製作を通して、イサオさんはいろいろなことを学んだ。
撮影現場の文化もその一つだ「結局人は皆同じ。国とかよりも、個性の方が違う。韓国でも現場で遠回しに言う監督もいれば、将軍みたいな監督もいる。日本でもほんとに同じでした」。

3 年間の日本の経験を経て、人脈も日韓の現場からプロデューサーレベルまで広がっている。広い視野と確かな力が付いている。

「政治とかいろいろあって難しいですけど、それを乗り越えられるのは芸術だと思うんですよ。人はみんな一緒。笑うし、泣くし、怒るし、お腹すくし。だからいい映画を作って韓国と日本の架け橋になりたいです。不思議ですが、同じ事件や似てる事故が歴史をみると繰り返してるんですよ。日韓の若い人達が不幸な歴史を繰り返さないように、明るい未来のために！芸術で一緒になって行きたいと思います。あと、最後に僕を応援して下さった日本の方、在日の方には、本当にありがとうございましたと伝えたいです」。まるで映画のワンシーンか、何かの受賞スピーチのように、実に力強く語ってくれた。

『冷温』公式ページ
http://reion.jp/

＜『中間報告書』の感想＞

中間報告書を読んで

栃谷 佳宏
（31 歳、男性、教員、東京都）

インタビューに登場する韓国人の人々によって語られる内容を見ると、自己の日々の生活や日本の現代社会についての現実的な分析や批評がその多くを占めていることに気づく。もちろん、このインタビューの質問項目が「①日本に来日した経緯、②現在何をしていて、③どのような将来構想をもっているのかを中心に」と設定されているから、と言えばそれまでの話なのであるが、「自由に語っていただく手法」をとっているにも関わらず、日本と韓国の二国間の歴史的な諸問題について積極的に意見を述べたり、さらに率直に言えば、今日に至るまでの日本の歴史的対応の経過を批判したりする論調がほとんど見られないことに、私は軽い驚きと、二つの国の建設的な未来の姿に対する期待感を覚えずにはいられなかった。

自分の母親が社会科の教員をしていたこともあり、私は幼い頃から、太平洋戦争中の二国間に起こったさまざまな問題について知る機会があった。敢えて「機会があった」という言葉を使ったのは、自分の知る限りでは、この問題について話題を共有できる同世代の友人はこれまでほとんど皆無に等しかったからだ。つまり、私は日本の東京で生まれ育ち、区立の小中学校、都立の高校を卒業したが、この問題について自分がいくつかの本を読んで知った内容以上の授業は、ほとんど一度も受ける「機会がなかった」。他方で、韓国ではこの問題についてすべての韓国国民がある程度の内容を学んでいることも知っていた。二国間の歴史に対する政府の姿勢の相違が、そのまま公教育の中での位置づけの温度差になってしまっていることを、私は１２年間の公教育の中で確認したにすぎなかった。こんなことをやっていたら、お互いの文化的な歩み寄りや相互理解なんて、永遠に進まないのではないか？高校生ながらに、私は偉そうに両国の未来について、なかば諦め、悲観していたのである。

ところが、私が大学生の時（2002 年）、サッカーワールドカップが二国共同開催された。にわかサッカーファンになった私は、連日テレビに映し出される両国の選手の活躍に熱狂した。私が通っていた大学周辺の駅や街中の標識に、見慣れない文字が書き加えられた。ここ数年は韓国のドラマやアーティストなどが日本でも人気を博した。私の嫁は短大時代、決まった曜日の夕方には欠かさず家に帰ってきて、「天国への階段」の再放送を泣きながら見ていたという。あげく、辛い物が苦手なのに友達に誘われた勢いで、女の子グループで韓国へ旅行にいって大いに楽しんできたらしい。私など未だに行ったことがないのに……。

ともあれ、机の前で悶々としていた自分と、自覚がないながらも屈託なく韓国の文化と出会い吸収していった嫁、どちらが建設的で現実的だろうかは答えるまでも

ない。そしてそれについては、このインタビュー集に登場する人々も同様である。ある人は生活の必然に迫られて、ある人は夢やビジネスチャンスを追って、またある人は日本の文化に惹かれて……「日本と韓国の歴史的軋轢を解消するための一助となるため」なんて人は、少なくとも私がこれまでに読ませてもらったインタビューには一人も登場しなかった。

歴史がどうのこうのと大上段に構えてあれこれ悩んでいる間にも、世界は毎日変化し続けている。一人一人が毎日を精いっぱい生きる、そのことが結果としてよりよく世界を変えていくのだ。私もいつの間にか自ら見限っていた日本の公教育の一翼を担う人間となり、日々仕事に追いまくられているが、それはそれで悪くないことなのかな、とも思ってみたりする。でも息子がもう少し大きくなったら、夏休みをもらって家族で韓国に行ってみたい。それが真の理論的実践というものだ。

＜コラム＞

新宿への誘い

呉　世蓮

観光客にとって欠かせない必須観光地である新宿は、渋谷、池袋とともに東京を代表する副都心の繁華街です。新宿はビジネス、ジョッピングのみならず、交通手段も非常に便利な街です。

新宿駅を中心に、東と西に分けることができます。

東駅の東新宿は、ショッピングモール、レストランなどが集まり賑やかな雰囲気を味わうことができます。まるで韓国の大学街を思い出させるような街並みでしょう。

次の西駅に位置する西新宿は、東新宿と違って高いビルが森のように建てられています。ここは、韓国のソウルにある乙支路（ウルジロ）や鍾路（ジョンロ）に該当する地域といえるでしょう。

新宿は韓国の江南のように計画によって発展した副都心です。昔の日本らしい和の雰囲気を感じることは難しいかもしれませんが、高層ビルや高級感溢れるデパート、モダンで異国的な街並みが自慢です。多様な案内表示板のお陰で、ここ新宿を初めて訪れる旅行者でも気楽に街を闊歩できます。このように新宿は、派手な街、賑やかな街であることが印象に残ります。

ところで、巨大なコンクリートシティである新宿が枯れない理由は、所々で青い公園に占められているからです。ここ新宿にも新宿御苑という公園があります。新宿御苑は、イギリス風景式庭園、フランス式庭園、日本庭園などを組み合わせた近代西洋庭園です。広々とし、周りと完全に遮断された緑地の新宿御苑にいると、果たしてここが数百万人の人口で騒がしい新宿の真ん中なのか、疑うほどです。

新宿を満喫する方法は様々です。新宿の東新宿で仲間たちと軽く一杯飲みながら素朴な時間を過ごすもよし、西新宿の高層ビルにのぼり、ロマンチックな夜景を見降ろすもよし、あるいは週末には、豊かな自然とふれあえる新宿御苑でのんびり過ごすなど、自分の感性に合わせて多様な選択を可能にしてくれる街です。

このように多様な新宿の魅力に魅了されるかもしれません。あなたはいかがですか。

<컬럼>

신주쿠로부터의 권유

오세연

관광객에 있어서 빼놓을수 없는 필수 관광지인 신주쿠는, 시부야, 이케부쿠로와 같이 동경을 대표하는 부도심의 번화가입니다. 신주쿠는 비지니스, 쇼핑 뿐만 아니라, 교통수단도 매우 편리한 거리입니다.

신주쿠역을 중심으로, 동쪽과 서쪽으로 나눌수 있습니다.

동쪽역의 동신주쿠*(히가시신주쿠)는, 쇼핑몰, 레스토랑등이 모여 있어서 떠들썩한 분위기를 느낄수 있습니다. 마치 한국의 대학가를 연상시키는 거리입니다. 다음은 서쪽역에 위치한 서신주쿠*(니시신주쿠)는, 동신주쿠*(히가시신주쿠)와 다르게 높은 빌딩이 숲처럼 세워져 있습니다. 여기는, 서울에 있는 을지로나 종로에 해당하는 지역이라고 말 할수있죠.

신주쿠는 한국의 강남처럼 계획에 의해서 발전 한 부도심입니다. 옛날 일본의 고풍적인 멋스러움을 느끼지는 못하지만, 고층빌딩,고급감이 넘치는 백화점,현대적이고 이국적인 거리가 자랑거리 입니다.

다양한 안내표지판 덕분에 이곳 신주쿠를 처음 방문하는 여행자도 가벼운 마음으로 거리를 활보 할수 있습니다. 이처럼 신주쿠는, 화려한 거리, 떠들썩한 거리라는 인상이 깊습니다.

그런데, 거대한 콘크리트 시티인 신주쿠가 메마르지 않는 이유는 곳곳에 푸른 공원이 자리 잡고 있기 때문입니다. 여기 신주쿠에도 신주쿠교엔 이라는 공원이 있습니다. 신주쿠교엔은, 영국풍경식 정원, 프랑스식 정원, 일본정원등을 조합한 근대서양 정원 입니다. 넓고, 주변과 완전히 차단 되어진 녹지의 신주쿠교엔에 있으면, 과연 여기가 수백만명의 인구로 떠들석한 신주쿠의 한복판인가, 의심할 정도 입니다.

신주쿠를 만끽하는 방법은 여러가지 입니다. 신주쿠의 동신주쿠*(히가시신주쿠)에서 친구들과 가볍게 한잔 마시면서 소박한 시간을 보내는 것도 좋고, 서신주쿠*(니시신주쿠)의 고층 빌딩에 올라가서 로맨틱한 야경을 내려보는 것도 좋고, 또는 주말에는 푸른 자연과 함께 신주쿠교엔에서 한가로이 보내는 등, 자신의 감성에 맞춰서 다양한 선택을 가능하게 해 주는 곳 입니다.

이처럼 다양한 신주쿠의 매력에 매료될지도 모릅니다. 당신은 어떠세요?

スケジュール／스케쥴

2009 年
11 月　準備
12 月　パイロット調査
2010 年
1 月　インタビュー開始
5 月　成果公開　（ホームページ、印刷物など）
9 月　成果公開　（ホームページ、印刷物など）
10 月　中間報告会・中間報告書発行
2011 年
5 月　成果公開　（ホームページ、印刷物など）
10 月　最終報告会・最終報告書発行

2009 년
11 월 준비
12 월 예비조사
2010 년
1 월 인터뷰 개시
5 월 성과 공개 (홈페이지, 인쇄물등)
10 월 중간보고회, 중간보고서 발행
2011 년
3 월 성과 공개 (홈페이지, 인쇄물등)
10 월 최종보고회, 최종보고서 발행

プロジェクトメンバー／프로젝트 멤버

渡辺 幸倫（わたなべ・ゆきのり／와타나베 유키노리）**相模女子大学学芸学部准教授**／社会教育、言語教育

若園 雄志郎（わかぞの・ゆうしろう／와카조노 유시로）**北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員**／社会教育、少数民族の教育

川村 千鶴子（かわむら・ちずこ／카와무라 치즈코）**大東文化大学環境創造学部教授**／移民政策、多文化社会論

宣 元錫（そん・うぉんそく／선원석）**中央大学総合政策学部兼任講師**／社会政策、労働問題、移民政策

藤田ラウンド 幸世（ふじたらうんど・さちよ／후지타라운도 사치요）**国際基督教大学教育研究所研究員**／社会言語学、バイリンガル教育

河合 優子（かわい・ゆうこ／카와이 유코）**東海大学文学部准教授**／異文化コミュニケーション、メディア論

李 坪鉉（い・ほひょん／이호현）**早稲田大学教育・総合科学学術院非常勤講師、和洋女子大学人文学部非常勤講師**／社会教育、文化間移動者の文化変容

武田 里子（たけだ・さとこ／타케다 사토코）**明星大学非常勤講師・放送大学東京文京学習センター非常勤講師**／地域社会学、多文化社会論

堀内 康史（ほりうち・やすし／호리우치 야스시）**大東文化大学環境創造学部非常勤講師**／社会学

呉 世蓮（お・せよん／오세연）**早稲田大学大学院教育学研究科**／生涯教育、多文化教育の日韓比較

この研究に関するお問い合わせは：

연구에 관한 문의는：

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京 2-1-1

相模女子大学　10 号館 406 研究室　渡辺幸倫

watanabe-y@star.sagami-wu.ac.jp

プロジェクトのホームページ：

http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com

発行日：2011 年 5 月 5 日

無断転載を禁止します